

大唐西域記にみえる「多羅樹林」について

三保忠夫*・三保サト子**

Tadao MIHO and Satoko MIHO

On the Forest of Tala-trees Referred by the Xuán Zàng's Travels

Abstract

The Xuán Zàng's Travels made mention of the forest of *Tala*-trees in *Konkaṇapura*, south India.

A. F. Rudolf Hoernle drew a conclusion that the *Tala*-tree was *Corypha* palm. It seems his result is to the point. However there have been some mistake during the proving process.

Hoernle says, in those days, there was just *Corypha* palm, *Palmyra* palm did not exist yet in India.

But *Palmyra* palm has already existed there in my opinion.

The forest of *Tala*-trees was a *Corypha* palm plantation. *Corypha* palm leaf was more excellent for writing materials than *Palmyra* palm one. So the plantation of *Corypha* palm was administered by *Konkaṇapura*.

[Key Words: Xuán Zàng's Travels, Palm-leaf-manuscripts, *Tala*-palm, *Corypha*-palm, *Palmyra*-palm, Writing-materials, A. F. R. Hoernle]

はじめに

唐の玄奘三蔵Xuán Zàng⁽¹⁾は、太宗の貞観3年(629)8月、長安を出発してインド・西域に自ら梵經・胡經を求めた求法の人である。長安に帰朝したのは同19年(645)正月のことであった。

その旅行記、また、伝記は、大唐西域記十二卷(辯機編, 646年)、大慈恩寺三蔵法師伝十卷(慧立撰彦棕箋)として今日に伝わり、7世紀前半における中国、中央アジア、インド等の事情を知る上では不可欠の文献となっている。

その大唐西域記により、前稿⁽²⁾では、当時のインドにおける書写素材Writing Materials について、次のように述べた。

1) 当時、インド(南インド)における經典類、文書類はヤシの葉に鉄筆をもって行われていた。

2) その書写素材は、適宜、そここの身近なところから入手されたかと想像される。

3) とところが、大唐西域記によれば、そのような素材に関わる記述(言及)は、「南印度境」の「恭建那補羅国」の次の1ヶ所しかない。

城北不遠有_レ多羅樹林。周三十余里。其葉長広其色光潤。諸国書写莫_レ不_レ採用。林中有_レ窣堵波。是過去四仏坐及経行遺跡之所。其側則有_レ聞二百億羅漢遺身舍利窣堵波也

(大唐西域記, 卷11, 大正新脩大蔵経, 第51巻, 934頁)

4) 広いインド大陸において、また、その旅行記において、書写素材としてのヤシは、何故、ここだけに記されているのであろうか。偶然であらうか、あるいは、それなりの訳あつてのことであらうか。

5) これにつき、恭建那補羅国には、書写専用の素材

*島根大学教育学部(日本語学)

**島根女子短期大学

とするヤシの林，即ち，「多羅樹林」が経営されていた，同国は，その葉を調製・加工し，大々的に他国に輸出していた，同国は，そうしたヤシの葉の特産地であり，その製品は同国の特産品であって他国からも高い評価を得ていた。

これが前稿であった。同様の気候・風土の下にある南インド一帯，また，その近辺の各地，スリランカなどにも「多羅樹」は生育し，等しくその葉を書写素材としていたはずである。従って，その記述については，偶然的筆遣いによるもの，あるいは，恣意的な筆遣いによるものとみなすこともできる。だが，たとい，他国・他地域のいずれかにおいて同様の特産地が存在していたとしても，やはり，これは，その特産地としての同国について記述したものと解釈される。

前稿においては，その「恭建那補羅国」の所在，「多羅樹林」というヤシの実体（種類）には触れなかった。別稿を用意していたのであるが，この過程において，ハーンリ A. F. Rudolf Hoernle にも同趣の見解が提出されていることを知った。しかし，彼の根拠は，私見の場合とは大きく相違する。

そこで，以下には，次のような点について私見を述べてみたい。

「恭建那補羅国」の所在

書写用ヤシの種類

ハーンリ A. F. Rudolf Hoernle の所説

仏書・仏書音義

Lalita Vistra 所見の Tala-phalasya

1. 「恭建那補羅国」の所在

「^{コンカナブラ}恭建那補羅国」は，「^{ドラヴィダ}達羅毘荼国」より北方（西北）へ林野中に入り，孤城や小村を通り過ぎて，行くこと二千余里の地にあり，また，これより西北へ大林野に入り，行くこと二千四，五百里で「^{マハラツタ}摩訶刺侏国」に至るという（大唐西域記）。玄奘は，デカン高原 Deccan Plateau を西北方面に縦断したことになる。（後掲の地図参照）

この恭建那補羅国の位置については諸説があり，現在なお確定してはいないようである。今，Thomas Watters 氏の "On Yuan Chwang's Travels in India AD 629-645" によれば，次のようである。このオリジナルは，その死後，T. W. Blyth Davids と S. W. Bushell によって刊行された（1904-05年，Rondon）。

In all texts of the Records, and in the fang-chih, the direction from Dravida is given as north, but the Life makes it to have been north-west. M.

Saint-Martin, Cunningham, and their successors all adopt the direction given in the Life, passing over the statement in the Records. Saint-Martin thinks it possible that Banavasi (or Vanavasa) may have been the Koñkaṇa-city of our pilgrim.¹ Cunningham suggests "Annagundhi on the northern bank of the Tungabhadra river" as the capital of the country, and Fergusson can only refer the capital to some place in Mysore.² Mr. Burgess is disposed to seek for Koñkaṇapur about Kopal or Kokanur (? Koñkanur) which is 310 miles as the crow flies from Kañchi and 335 miles from Nasik;³ this seems to be also the present opinion of Dr. Fleet who was at one time disposed to identify Koñkaṇapur with Karnul.³ But these identifications seem to be all beset with difficulties. The country Koñkaṇa was in the southern division of the Brihat Samhita, and Alberuni places it the south near the sea.⁴ If we could adopt the reading of the D text, viz- *Tu* (茶) or *Ch a* (茶) for *Kung* the original would be a word like Dakkanapura or Thakkanapura.

(Munshiram Manoharlal Publishers Pvt.Ltd., New Delhi, 1996, p.238) (前後略す)

脚注(1~4)にはそれぞれの典拠が示されているが，煩雑になるので，ここでは省く。文中，"the Records" とは大唐西域記，"the Life" とは大慈恩寺三蔵法師伝，"the Fang-chih" とは釈迦方志をいう。

M. Saint-Martin, Cunningham, Fergusson, Burgess, Fleet, Alberuni といった名が挙がっている。今，各個の詳細については言及できないが，これらを承け，季羨林等校注『大唐西域記校注』（中外交通史籍叢刊，1985年2月第一版，中華書局，）は，Cunningham（康寧哈姆，"Ancient Geography of India", rev. by Majumdar, Calcutta, 1924, reprinted, Delhi, 1979, p.632, 745.）の説が比較的肯定されるといい，

康氏認為玄奘所記此国“周五千余里”，其領域為起自半島西海岸，越過西高止山脈深入半島腹地的一大片区域，北為摩訶刺侏，南為達羅毘荼，東為馱那羯磔迦，西至於海，即在通加巴德臘（Tungabhadra）河流域，并以該河北岸的安納貢底（Annagundi）為其都城旧址。（888頁）

と紹介している。

玄奘は，ドラヴィダ国から北方へ（大唐西域記，卷11），あるいは，西北へ（大慈恩寺三蔵法師伝，卷4）歩を進

め、「入- 林野中-。歴- 孤城- 過- 小邑-。凶人結 党作- 害羈旅-。行- 二千余里- 至- 茶(恭)建那補羅国-」と記す(大唐西域記)。

タミル・ナドゥ Tamil Nadu 州の「建志補羅」^{カーンチープラ} 辺からカルナータカ Karnataka 州, 更には, マハラシュトラ Maharashtra 州に向かう道筋として, 次が考えられる。とはいっても, これは今日の地図上に, 彼の辿ったと推測される方向性を求めたに過ぎない。以下に用いる地図は下記である。

S. Muthiah, Dr. R. Ramachandran, P. Poovendran, "An Atlas of India", Oxford University Press, New York, 1990.

) その1は, 今のカーンチープラム Kanchipuram からそのまま西北方向へ進路を取り, アーンドラ・プラデーシュ州 Andhra pradesh のクダパ Cuddapah, ゴーチ Gooty を経てナショナル・ハイウェイ7号線を跨ぎ, カルナータカ州のベラリ Bellary 方面に至るコースである。この7号線は, クルヌール Kurnool を経て州都ハイダラバード Hyderabad 方面へ伸びている。

B) または, カーンチープラムから西北へ進むものの, 7号線寄りに道を取り, チトール Chittoor, カディリ Kadiri, アナンタプラ Anantapur を経てベラリ方面に至るコースである。

これら2コースとも, 今日, 列車が通っている。

C) ナショナル・ハイウェイ4号線に示唆されるようなルートも有力視される。この4号線は, マドラス Madras, カーンチープラム Kanchipuram, チトール Chittoor を経てバンガロール Bangalore に至る。マドラスとバンガロールの間は列車で6時間, バスで9時間位である。バンガロールは, かつてのマイソール王国, 現カルナータカ州の州都で, その南東端, 海拔920メートルの高原に位置する⁽³⁾。

4号線は, タミル・ナドゥ州からカルナータカ州南部に入る動脈コースであり, バンガロールから, 更に西北へ伸びてマハラシュトラ州, 即ち, 玄奘が次に訪れた「摩訶刺佉国」に至る。但し, 彼は, 4号線のようなルートをそのまま進んだとは考えにくい。途中のチトラドゥルガ Chitradurga あたりで, あるいは, 進んでも, 今の13号線との分岐点辺りで右に折れ, 真っ直ぐ北上したのではあるまいか。

D) バンガロールから南西へ約140キロメートル(直線距離)下ったところ, 標高770メートルの盆地にマイソール Mysore がある。バンガロールから鉄道(Exp. 1日5本, 4時間)もあり, バス網も備わっているが, ここは, むしろカーヴェーリー Cauvery 河に沿って栄

えた文化都市群の1つと見てよからうか。ここも, 「恭建那補羅国」の所在に関して注目されている。しかし, マハラシュトラへのコースから大きく外れる点が問題であろう。

E) バンガロールから4号線ルートを外れてシモガ Simoga 方面に向かった可能性はなくてはなからう。これは列車のルートに沿ってマイソール高原 Mysore Plateau を東側から回り込んでシモガに至るものである。この辺りは, 西ガート山脈に続く高地, 丘陵の地帯であり, 湖沼も河川もあってマイソール以上に栄えていたかもしれない。但し, マハラシュトラ州へ行くには, やはり遠回りとなる。この地に, 彼の求めるものがあつたかどうか問題であろう。

F) 「恭建那補羅国」の所在に関しては, クルヌール Kurunol (Andhra pradesh 州在) との地名も挙がっている⁽⁴⁾。これは, ベラリより東北方向へ直線距離で140キロメートルの地点に位置する。が, 道筋としては, バンガロールから真っ直ぐ北上してハイダラバードを目指途中に位置する。今の7号線上でもあるが, クルヌールに至らず, 途中のゴーチで左折すれば, すぐにカルナータカ州のベラリに至る(上述A)。玄奘が, カーンチープラを発つてマハラシュトラ州, ナーシク Nasik 県方面を目指すとすれば, 此の地を経由するのも不便ではなからうか。

玄奘が, 如何なる理由で如何なるコースを選んだか, 詳しいことはわからない。不合理のように見えるコースでも, それなりの理由があつたはずであるが, 総じて, この辺りのコースとして推測しやすいのは, バンガロールを経て7号線, あるいは, 4号線 または, 少なくとも, この2本の道に挟まれたいずれかの道を選び,

(イ) ほぼ真っ直ぐに北上してベラリ方面, あるいは,

(ロ) やや北西に進んでチトラドゥルガ方面に至るコースではあるまいか。このコース沿いには, 貴重な遺跡も点在している。

ところで, 「恭建那補羅国」の都としては, A. Cunningham (康寧哈姆) 氏により, トウンガバドラー Tungabhadra 河(湖)の北岸アナグンディ Annagundi が挙げられている。水谷真成訳『大唐西域記』(中国古典文学大系22, 1994年, 初版第8刷, 平凡社, 347頁), 季羨林等『大唐西域記校注』も, これを支持している。別にはクルヌールやベラリといった地名も見えるが⁽⁵⁾, カーンチープラからの, また, マハラシュトラへの距離や方向性(北方, または, 西北方)を考慮すれば, その「大都城」の所在は, Cunningham 氏に従ってよくなるか。Burgess 氏の "Kopal" が, 今の Koppal を指

すとすれば、これもトゥンガパドラー河（湖）に近い。

インドやスリランカなどを見渡すと、古来、都城や大寺院は湖や大池、あるいは、貯水池を具備するのが常であったように見受けられる。今の場合も、この大河（湖）の存在が無視できない。

トゥンガパドラー河は、西ゴート山脈の各地に水源を持ち、デカン高原、大陸を横断する大河である。やがて、クリシュナ Krishna河と合流し、ゴダーヴァリー Godavari 河に同様、アーンドラ・ブラデーシュ州からベンガル湾（コロマンデル海岸）に流出し、河口部（Mouths of the Krishna）に大きな三角州を張り出していく。カルナータカ州やマハラシュトラ州、以下、インドの諸州は、そうしたトゥンガパドラー河、クリシュナ河、ナルマダ Narmada河などによって寸断されているかのような感すらある。

トゥンガパドラー河は、その中部において一旦流れを留め、大湖をなしている。これが、今の Tungabhadra Reservoir である。先の『校注』では、これを「海」と称しており、Cunningham氏は、この北岸の Anagundi にその都城の旧址があるというのである。

現在の大河の流れや湖沼が、往時のままとは限らないが、ベラリ Bellaryからは、ほぼ真直ぐ西へ河を下った100 キロメートル（弱）の地であり、背後（北方）には、バーダミ・ヒル Badami Hillが控えている。チャールキヤ王朝の都とされたバーダミは、西北へ100キロメートル（直線距離）の地に位置する。

玄奘が、ベラリを経由したかどうかかわからない。だが、カーンチプラから西北へ向かい、チトラドゥルガ、ジャガルー Jagalur辺りを経て、この Tungabhadra Reservoirに至った可能性はある。

なお、トゥンガパドラー河（湖）北岸は、海拔300～600メートル位、バーダミ・ヒルでも600～900メートル位である。今日、この辺りの年間平均気温は25.0～27.5度、同降雨量は40～80センチメートル、土壌はBlack soil、及び、Mixed Red and Black soilという。広く、Millets 類⁽⁶⁾が栽培され、また、綿花や米が栽培されている。木綿の栽培は多肥を要し、時期によって水不足も禁物である。

2. 書写用ヤシの種類

「恭建那補羅国」の「多羅樹林」につき、大唐西域記に「其葉長広其色光潤。諸国書写莫不採用。」とある。これにつき、かつて、諸国の人々は、この国より多羅樹の木材を購入して薄板となし、その上に文字を書写すると説くものがあつたが⁽⁷⁾、これは明らかな誤りである。

また、こうしたインド南部の書写素材に言及して、「薄くそいだ竹で作られたこの「書物」は、祈（折カ）りたためるようになっていく。」⁽⁸⁾と説くものもあるが、阿部登氏の御指摘通り、これも誤解である。

即ち、大唐西域記のこの「多羅樹林」とは、「多羅（樹）」というヤシの木の葉を「書写」に利用すべく営まれていた林であった。『望月仏教大辞典』第4巻によれば、この「多羅樹林」につき、「この樹木はpalmyra tree 又は fan-palm と称し」（3531頁）とある。しかし、私見では、これはpalmyra tree、つまり、パルミラヤシでなく、コリファヤシCorypha（英名タリポットヤシ）であると判断される。

「多羅」の葉は、別に「貝多羅（葉）」ともいう。「貝多羅」とは、サンスクリット（梵語）のpattra、または、patra（パーリ語 patta）の音に漢字を宛てた梵音漢訳語である。『漢訳対照梵和大辞典』（鈴木学術財団、1994年第8刷、講談社）には、次のようである。

pattra [中性名詞] 翼；羽毛，矢羽；乗物（車・馬 またはらくだ）；（樹の羽毛），葉，花卉；（書くために用意した）葉 [~m aropayati = 紙に書き記す]；手紙，文書；金属の箔または板金；（-°）（で彩られた）飾り葉；[芳香のある特殊の植物の葉または芳香のある葉をもつ特殊の植物]；（植物の一種，学名Laurus cassiaの）葉；【漢訳】葉，樹葉，瓣，花葩；蓋；券，契書 Bodh-bh., Divy., (後略) (729頁)

pattraを構成要素とする語句も多く掲出されている。樹木であれ、野菜であれ、その葉をpattraというわけで、本来、これをもって直ちにコリファヤシ、パルミラヤシのいずれかを指すわけではないが、これらが書写用の料紙として用いられたところから、これらの葉、また、これで作った料紙、更には、書き上がった典籍、梵夾（笈）を「貝多羅（葉）」というようになったらしい。

しかし、それだけのことなら、玄奘は、わざわざ「恭建那補羅国」の「多羅樹林」につき、筆を費やすことはなかったはずである。大唐西域記巻11に、その言及があるということは、そこに特別の事情があつたのではないかと推測されるのである。

典籍や文書に利用される書写素材 Writing Materialsとしてのヤシには、大きく分けて、二種類がある。その一は、コリファヤシ（タリポットヤシ）であり、他の一は、パルメラヤシ（オウギヤシ、パルマイラ）である。これらにつき、植物図鑑には次のようである。

[コリファヤシ（タリポットヤシ）について]

ヤシ類：

コリファ [属]

Corypha L.

ヤシ科。約 8 種が熱帯アジア～オーストラリアに原産する。幹は丈夫で高く、刺はない。葉柄は長く、両縁に強靱な刺をつける。掌状葉はヤシ科の中でもっとも大形となり、葉身は円形または三日月状で深裂する。雌雄同株。肉穂花序は非常に大きく、直立して多数分枝し、円錐状になり、葉冠の上に抜き出て展開し、壮観である。花柄は管状の苞に包まれ、花は小形で淡い黄緑色を帯びる。雄しべは 6 個。子房は 3 室。果実は通常球状。種子はかたく、胚乳は均質である。株は成熟するまで (20～80 年) 花をつけない。花をつけ始めてから葉はしほみ落ち始める。果実の成熟に 1 年以上を要し、植物は徐々に枯れる。

C. umbraculifera L. (ウンブラクリフェラ) (和) コウリバヤシ / (英) talipot palm / (独) Talipotpalme 原産地はスリランカ、インド南部のマラバル海岸で、標高 600m 以下の湿潤地帯に生育する。幹は高さ 24～30m、径 60～90cm。葉柄は長さ 1.5～3m で幅は他種より広く、5～10cm となり強大である。掌状葉は径 2.4～4.8m で、裂片の先端はさらに裂ける。花序は長さ 3～6m で、植物界では最大の花序の部類に入る。果実は径 3.5cm。種子は球状で非常にかたく、表面は滑らかで光沢がある。発芽日数は 52～108 日。葉は傘にし、種子は象牙のようにかたいので、数珠玉、ボタンに加工し、また色づけして珊瑚の類似品とする。

[栽培] 別項「ヤシ類」を参照。 <仙頭照康>

[パルメラヤシ (オウギヤシ, パルマイラ) について]

ヤシ類：

オウギヤシ属

Borassus L.

ヤシ科。7 種が熱帯のアフリカおよびアジアに原産する。高木性のどっしりしたヤシで、幹は単一、刺はなく、環状の葉痕が残る。葉柄は重々しく強靱で、両縁には通常刺がある。葉は大きくてかたく、中肋のある掌状葉である。雌雄異株。花序は葉間より出る。葉柄は伸長し、数個の筒状の苞がある。雄花序は分枝が多く房状になり、分枝部に筒状の苞がある。雄花は、花軸にかわら重ね状に配した小包の腋にある穴の中で束状に集まってつく。雌花序は単一、またはまれに 2～3 本の分枝をもつ。雌花は花軸の小包腋に 1 個ずつつく。雄花の萼は離生して 3 萼片をなすか筒状で 3 裂し、花弁は 3 個、雄しべは 6 個、雌しべは微小かまたはない。雌花は雄花より大き

く、萼片および花弁は各 3 個、萼片は基部で重なり、花弁をおおう。雌しべは球状の卵形、子房は 3 室。果実は大きく、球状または長方形、中果皮は多肉で繊維質、内果皮はかたくて厚い。種子は 1～3 個で胚乳は均質である。種子は非常にかたく、発芽に時間がかかるため、やすりで種皮をこすったり、温湯につけるなどの方法で、発芽の促進をはかるとよい。株の雌雄の識別は開花まで容易でない。

B. flabellifer L. (フラベリフェル) (和) オウギヤシ, パルマイラヤシ / (英) doub palm, Palmyra palm, tala palm, toddy palm / (独) Lontaropalme, Parmyrpalme 原産地はインド、スリランカ、ビルマ。幹は高さ 20～30m、径 60～90cm、黒色を呈し、ときに中央の上方がふくらみ、上に向かって再び細くなる。若木では、幹は葉および葉柄の基部でおおわれるが、古くなると葉柄の黒色の痕跡が残る。葉柄は長さ 0.6～1.2m で、両縁に刺がある。掌状葉は径 0.5～1.5m で灰緑色。小葉は披針形または剣状で 60～80 個あり、革質でかたく、先端は 2 裂する。雄花序は長さ約 1.5m。雄花の萼は離生し、花弁は短くへら状倒卵形。雌花は径約 5cm の球状で、萼片は腎臓形。3～4 月に開花して 7～8 月に成熟する。果実は一方がへこんだ球形、径 15～20cm、黄色～褐色～黒色。果面は滑らかで、中果皮は強靱な繊維質、種子を 1～3 個含む。花軸から出る液や甘い果汁から糖をとり、これらからヤシ酒、食用酢、薬用物をつくる。幹は硬質のため、ヤシでの建築材としては最高で、家具、工芸品の材料にもする。葉は屋根ふき用や敷物に、繊維はロープとする。利用法は多岐にわたり、各地で広く栽培されている。

[栽培] 別項「ヤシ類」を参照。 <仙頭照康>

(以上、相賀徹夫編集『園芸植物大事典 5』, 1989 年 12 月, 小学館, による)

ヤシの葉には、大きく分けて羽状複葉と掌状複葉との二つのタイプがある。前者は、葉柄と葉軸につく小葉とからなる。後者は、葉柄の先に放射状につく小葉を節葉という⁽⁹⁾。上記の二種のヤシは、共に掌状葉といってよいが、パルメラヤシ (オウギヤシ) *Borassus flabellifer* L. の葉身は、「よく見るとまだ羽状複葉の時の名残が見られるから羽状から掌状にうつる過程の種類なのである。」とされる⁽¹⁰⁾。

さて、コリファヤシの掌状葉は径 2.4～4.8m、パルメラヤシのそれは径 0.5～1.5m という。前者からは、より大きな料紙が切り出せるわけだが、これら 2 種のヤシに

つき, Institute of Asian Studies, "A Descriptive Catalogue of palm-leaf Manuscripts in Tamil", (vol.I, Part I, 1990)には, 次のようにある(原文英文)。

ヤシの葉の二つの主な種類が, 書記に用いられる。タリポットヤシ Talipot palm (*Corypha umbraculifera*) は, 湿度の高い海岸沿いの地域に成長し, マドラスの北東海岸の原産 (native) である。パルミラヤシ palmyra palm (*Borassus flabellifer*) は, 比較的乾燥した気候で成長し, ざらざらした (rough) きめの荒い (coarse) 葉を生じさせる。タリポットヤシの葉は, 紙 (paper) に比べることができ, きめ細かく, 滑らかで柔軟性を有している。タリポットヤシの葉は, 滑らかで, 吸収性があり, ブラシやペンにカーボンインクを着けて書記用に用いることができる。パルミラヤシの葉は, とても厚く, 非常に硬い表面をしている。それらは, 最初に鉄筆 (stylus) で刻みを付けられ, その後, その刻みはランプのスス (lamp black) で, いくらかのものは, 油が塗られ, インクは塗られないが, 黒く色付けされる。(p.)

同趣の言及は他にもあるが, 遡れば, George Buhler の "Indian Paleography" の "Writing Materials, Libraries and Writers.", "§ 37. - Writing Materials"⁴⁹⁰ に, 次のようにある⁽¹¹⁾

D. Leaves.

According to the Canon of the Southern Buddhists (see above. page 20), leaves (*paṇṇa*) were in ancient times the most common writing material. Though the texts⁵⁰⁰ do not mention the plants which furnished these leaves, it is not doubtful that they came then, as in later times, chiefly from the large-leaved palm-trees, the *tada* or *tala* (*Borassus flabelliformis*) and the *taḍi* or *talī* (*Corypha umbraculifera*, or *C.taliera*), which, originally indigenous in the Dekhan, are found at present even in the Pānjab. The earliest witness⁵⁰¹ for the general use of palm-leaves throughout the whole of India is Hiuen Tsiang (7th century). But we possess clear proof that they were used even in north-west India during much earlier times. The Horiuzi palm-leaf MS certainly goes back to the 6th century, and some fragments in the recently discovered Godfrey Collection from Kashgar belong, as Hoernle has shown on the

paleographical evidence, at least to the 4th century, and are older than the Bower MS⁵⁰². (p.113)

以下は略す。細字で⁵⁰⁰のようにあるのは翻訳前の原本の行数である。文中にはあちこちの参照箇所が指示されているので, これがないと困る。* 部には綴り字の a が脱落しているようである。

ここにはデカン高原 Dekhan に固有の *taḍa*, または, *tala* (*Borassus flabelliformis*) と, *taḍi*, または, *talī* (*Corypha umbraculifera*, or *C.taliera*) とが挙げられている。

コリファ *Corypha* 属には, 約 8 種が数えられるというが (前掲, 『園芸植物大事典 5』)⁽¹²⁾, 上の末部に見えるコリファ・タリエラ *Corypha taliera* Roxb. は, 同じく上に引かれているハーンリ Hoernle によれば, コリファ属のコリファヤシ *Corypha umbraculifera* L. に寸分違わず同一だという。

There is every reason to believe that *C. Taliera* and *C. umbraculifera* are identical.

(A. F. Rudolf Hoernle, "An Epigraphical Note on Palmleaf, Paper and Birch-bark", *Journal of the Asiatic Society of Bengal*, LX, Pt. 1, No.2, 1900, p.93)

これには従いにくいだが, この一方, コリファ・タリエラは, ベンガル・コリファヤシのことだと説かれる (上原敬二著 『樹木大図説』, 有朋書房, 1170 頁)。ベンガル地方の産で, タミル・ナドウの海岸地帯にも多いとされる。荒俣宏著 『花の王国 4 珍奇植物』には, 開花した状態の, 巨大で壮麗なこの「タリエラヤシ」の全体像が図示され, ベンガル地方産, 同属にタリポットヤシがあるとする。⁽¹³⁾

このヤシも, 書写のために (for writing), 最も広く用いられた (The most widely used) 3 種のヤシの一つであるが (他の 2 種は, コリファヤシとパルメラヤシ),

The leaves of *Corypha taliera* are thick and not very flexible. They are also prone to insect attack. (O. P. Agrawal, "Conservation of Manuscripts and Paintings of South-east Asia". Butter worths, Boston, 1984, p.25, 26)

というように, コリファヤシより厚目で柔軟性を欠き, 虫の害を受けやすいことが指摘されている。

しかし, (南) インドでは, これを用いないという。

Although there are many varieties of palm-trees, the leaves of three kinds of palm-trees were used

in India, Nepal, Sri Lanka, Burma, Thailand, Indonesia and Combia. They are the palmyra palm, talipot palm and *Corypha taliera* Roxb. In South India only two types namely the palmyra palm and talipot palm were used.

(G. John Samuel, "Palm-Leaf Manuscripts in Tamil and their Preservation", Institute of Asian Studies, *Palm-Leaf and Other Manuscripts in Indian Languages*, 1996, p.197.)

最近の報告書であり、これによれば、そこではパルメラヤシとコリファヤシとの2種だけを用いたとある。

タイでも、アユタヤ時代(1350~1767年)に、人々はパイ・ラーン Bai-larn と称するヤシの葉に、その歴史、宗教、経文等を書いたとされる⁽¹⁴⁾。タイ語で、bai は(木の)葉の意、larn (laan) はヤシの木(の一種)の意である。パイ・ラーンは、ロブリ Lopburi地方産のものが有名で、その葉は、少しばかり golden green 色をしているので、これを golden leaf というと説明される(既出, O. P. Agrawal 著書, 28頁)。そのヤシの葉、また、それで作成した書物(の形態にあるもの)をパイ・ラーン(貝葉本)というのである。

パイ・ラーン(貝葉本)は、恐らくは、それ以前から作成されていたと推測される。これには、「ヤシ科コリファ亜科に属するラーン *Corypha lecomtei* Becc. の葉を」用いたといい⁽¹⁵⁾、また、*Corypha umbraculifera* Line. を用いたという。この後者の方は、小林良生氏の実地調査によるもので、次のように述べられる。⁽¹⁶⁾

タイ科学技術研究所の副所長ナロン・チョムチャロウ博士及びタイ・ドキュメンテーション・センターの室長ノンパガ・チトラコーンさんによって、タイ人がパイラーンと叫んでいる植物は、学名を *Corypha umbraculifera* Line. であり、対応する英語は talipot palm あるいは fan palm ということを教えられた。加えて、ナロン博士はこれは他にも2種あり、一方はタイの北部に、他方は南部を中心に生育する種であるという。(中略) その一種は *C. utan* Lam, あるいは *C. elata* Roxb. であり、これに対応する英語は buri palm, gebang palm または angel palm である。もう一種は恐らく *C. laevis* A. Chev. である。(中略) 筆者は、はじめ葉というので扇形の葉の部分を使用するものと思っていたが、ナロン博士は実際は葉ではなく、葉柄(図二)から形成されるのだと強調された。(中略)

経典への利用についても訊ねてみた。葉柄からとれるパイラーンは、五〇~六〇センチメートルの長さ

に切り、両端から一〇センチメートル位の所に穴をあけ、ひもでゆるく結んで一巻の経典とする。(後略)

以下には、その生産地として、カピンブリ Kabin Buri やコーンキャン Khon khaen の様子について言及されている。文中の(図二)には、葉の葉柄部の密生する樹冠部の図版が示されている

文中、ナロン博士の強調された点には、皮肉なことに、不審がある。パイ・ラーンに用いる部分は、葉柄の先につく葉そのもののはずである。小林氏の実見記録の中には、「興味あることに、この葉柄部は幅広い白い葉状のものが丁度扇を閉じたように折畳まれているのである(図三)」(12頁, 図略)とも見える。「葉柄部」とはあるが、これは、その葉が展開する直前の、まだ葉柄も伸びていない幼葉部(幼芽部)のことであって、葉柄そのものではない。パイ・ラーンには、この幼葉部(幼芽部)を切り取り、ほぐし、調製していくのである⁽¹⁷⁾。小林氏も、葉柄(部)と葉そのもの(節葉部)とを混同していらっしやるのかもしれない。

また、上に見える *C. utan* Lam (英名 gebang palm) は、*C. elata* Roxb. の「異名」であるといい(前掲、『園芸植物大事典5』, 90頁)、かつ、*C. elata* Roxb. は、ジャフコリファヤシ *Corypha Gebanga* Blume, 英名 Gebang Palm に同じものであるという(上原敬二著『樹木大図説』, 有朋書房, 1169頁)。その英名 buri palm (ブリヤシ)の方は、フィリピンでの名称タガログ語 buri から来たものらしい(同上, 小林氏, 8頁)。

但し、ジャフコリファヤシは、書写(書記)には向かず、用いられたことがないとの発言がある。

I may add that there is a kind of *Corypha* palm, the *Corypha elata*, which grows, probably cultivated, in Bengal and Bihar. But its leaves are not suitable for the purpose of writing books, and have never been so used. Its complete natural segments are much too narrow; they measure only about 1/2 inches, and allow only strips of 3/4 inch or less to be cut from them.

(既出, A. F. Rudolf Hoernle, "Epigraphical Note on Palm-leaf, Paper and Birch-bark", p.97)

もう一方の *C. utan* に関連しては、インドネシア、バリ島のロンタルヤシがある。バリ島では、この葉で工芸品・装飾品を作り〔補説3〕、また、ロンタル文書(写本)を作成する。即ち、Albertine Gaur の "Writing Materials of the East" (British Library, 1979, p.14) では、

Three species of palm-trees provided material

suitable for writing : the talipat palm (*Corypha umbraculifera*), the palmyra palm (*Borassus flabellifer*) and, especially in Southeast Asia, the lontar palm (*Corypha utan*)."

と記す。まず、コリファヤシとパルメラヤシとを挙げ、その後、特に東南アジアではロンタルヤシだとし、この3種を比較して、

The leaves of the talipat palm are long and broad with a cross vein marking ; the palmyra leaf is hardly ever more than one and a half inches wide and shows a pock-marked surface ; lontar leaves seem to be a somewhat finer quality.

という。パルメラヤシはコリファヤシより硬い、ロンタルヤシは、幾分、より良質のようだというから、ロンタルヤシが最良のものということになる。

和久博隆編著『仏教植物辞典』(国書刊行会, 昭和54年10月)には、*Corypha utan* Lam. は、和名タラバヤシ、「貝多羅葉」(パルマイラヤシ<ウチワヤシ・オオギヤシ>*Borassus flabellifera*⁽³⁷⁾ Linn.)と同様、インド人は、針をもってこの上に経文を刻して梵夾とすとある(83頁)。タラバヤシからはデンプンを探り、花序液から黒糖を作る。

崎山理氏によれば、しかし、ロンタルヤシはニッパヤシであるとされる。即ち、「古代インドでは紙に代わるものとして、南インドに多いヤシ科の多羅樹(*Borassus flabelliformis*)の葉」が用いられたが、貝葉とは、この葉を乾燥して云々、

インドネシアでは貝葉はロンタル lontar といわれ、(中略)多羅樹ではなくニッパヤシの葉が用いられている。

と述べられている。⁽¹⁸⁾

Borassus flabelliformis との学名(属名、種小名)は、先の G.Buhler ("§ 37.-Writing Materials") も、*Borassus* パルミラヤシ "*tada* or *tala*" の意で用いている。だが、ハーフリ Hoernle は、Dr.Prain (Sibpur王立植物園長)の提供情報のもとに、*Borassus*の正式名は、通例の *flabelliformis* ではなく、*flabellifer* であるとする(A. F. Rudolf Hoernle, "An Epigraphical Note on Palm-leaf, Paper and Birch-bark", p.93 の注1)。

ニッパヤシ *Nypa fruticans* Wurmb. は、インド、スリランカ、オーストラリア、東南アジア等の汽水帯の湿地や河川流域によく見られるヤシで、地際から直に、あるいは、水底の幹からでも大きな(5~10m)羽状複葉を広げ伸ばしている。樹液からヤシ酒や砂糖を探り、その葉は、主に屋根葺き材や壁材とし、若葉をマット材や

タバコの巻き紙代わりに用いた。⁽¹⁹⁾

ニッパヤシの葉の表皮は硬くて耐久性に優れるが、葉の細胞構造として、コリファヤシのような柔構造を持たず、外力による破砕には弱いとされ⁽²⁰⁾、また、屋根葺きに用いても、腐るのは早く、何年もたないで頻繁に葺き替えるのだという⁽²¹⁾。この葉を、メモ程度に利用することは可能かも知れないが、書写本に用いるのは適当ではなさそうである。

崎山氏の説に対し、阿部氏は、「ロンタルとはパルメラヤシのことである。」とされる⁽²²⁾。また、産業植物として、専らこの栽培を説くパルメラヤシ職業開発グループによる「パルミラヤシからの地域づくり」⁽²³⁾でも、パルミラヤシの別名の一つに「ロンタルヤシ」を挙げている。

Bill Dalton, "*Indonesia Handbook*" (Moon Publication, U.S.A., 1978) には、"lontar palm (or fan-palm)" と "lontar literature" につき、簡潔な解説がある。前者につき、一部を要約しよう。

"lontar palm (or fan-palm)" は、長い乾季に耐える高いヤシの木で、1年に2度、雨季の初めに1度開花し、70~100年もの間、年平均600リッターのジュース juice を採取できる。tuak や酒、シロップ gul air を作る。葉は、屋根葺き材、籠、水よけ、マット、帽子、履物、楽器、カバン、sirih の箱、葉柄は、垣根、葉柄の繊維は馬具や綱、幹は、家や橋、馬屋の仕切り、家畜小屋に使用される。

(255頁)

これは、パルメラヤシを説明したものと解してもよいような説明である。但し、原文の "This tree flowers twice a year, once at the beginning of the wet." とある部分は不審である。インドでは、パルメラヤシは、乾季(10~3月)・暑季(4~5月)の3月から5月と、12月ごろに葉鞘に包まれた単性の花穂を出すと言われるが⁽²⁴⁾、タイでは、乾季(10~2月)の12~2月に花房ができ、暑季(2月中旬~5月)から雨季(5月中旬~10月)の6、7月まで樹液(花序液)を採るとされる⁽²⁵⁾。インドネシアの雨季は、大体、10月から3月まで、乾季は4月から9月まで、花序液を採るのは乾季だけである。また、パルメラヤシの雄花は、一年で3~9束、雌花は、4~5カ月間にわたって10束以上の花を着け⁽²⁶⁾、シロップや砂糖は、これらの花房を切って出る樹液(花序液)から作るが、雨季には、この樹液採取は適さないとされる。

なお、楽器にも利用されるとする点につき、小スンダ島のチモール島では、今でもロンタルヤシの葉で「ササ

ンドウ」というチモールの代表的な楽器を作っている。

以上、書写用のヤシの種類について述べた。トコロによってモノが変わり、名称が異なる。加えて、汎称もあれば別名・異名もある。巨大なヤシのことだけに持ち寄って比較することも困難である。できるだけ諸説を尊重したが、整理していくのに困難な部分もある。

ところで、コリファヤシは雌雄同株、パルメラヤシは雌雄異株で、二者間に大きな違いがある。花序の着き方・形態、葉の長さ、掌状葉の大きさ、成熟・着果年数、開花・着果期間などにも相違が見られるが、殊に注目すべきは、一にその生育・植生条件であり、一にはその用途、利用度であろう。

まず、生育・植生条件であるが、ハーンリ Hoernleによれば、コリファヤシ（タリポットヤシ）、及び、コリファ・タリエラは、南インドのマラバル海岸、スリランカを原産地とし、その野生種の限界は、北緯13度位までである、また、西海岸ならコンカン（北緯16度）からボンベイ（北緯19度）近くまでなら自由に栽培され、東海岸でも、非常にまれだが、ベンガル地方南部にまで栽培できる、だが、南インドの中央部、あるいは、高地では育たない、という（A. F. Rudolf Hoernle, "Epigraphical Note on Palm-leaf, Paper and Birch-bark", p.94.）

先の『園芸植物事典5』（相賀徹夫編集）に、「標高600m以下の湿潤地帯に生育する」とあるように、このヤシは、湿地というほどではないが、谷間たにまのような潤いのある土地を好むようである⁽²⁷⁾。何十年か経って始めて結実するが、果実 seed そのものは無数に得られ、落下した果実は、高温多湿により、比較的容易に発芽する。そのままでは互いに生長を妨げ合うことになってしまうが、植え替えは可能であるので、苗の内に適地に植え替え、栽培していけば良好なヤシ園ができよう。

パルミラヤシは、ハーンリ Hoernleによれば、アフリカからもたらされた外来種で、インドのどこでも自生はせず（does not grow *wild* anywhere in India）、村落周辺に栽培されて成長する、Panjab, Upper Sindh, また、Rajputana や北西諸州の最北部を除くインド全域で成長し、北限は、北緯27度か28度である、という（A. F. Rudolf Hoernle, "Epigraphical Note on Palm-leaf, Paper and Birch-bark", p.94.）

スリランカ、インドネシア、マレーシア、タイ、ミャンマ - などでも、かなり古くから栽培されてきたようだが、しかし、ところによっては自生化しており⁽²⁸⁾、野生化自体も可能である⁽²⁹⁾。その範囲も時代・時期によって移動するであろうが、インドでも、早くから自生種は存在したと推察される。

パルミラヤシは、「どのような地域や気候でも、比較的好く育つ。水を撒いたり化学肥料を与えたりする必要はほとんどなく、育成に手間はかからない。」⁽³⁰⁾とされる。乾燥した地帯にもよく見られ、スリランカの場合、その北部・東部地域、ジャフナ半島などに群生し、また、栽培されている。これらは、暑くて乾燥度の高く、砂地の目立つ地域である⁽³¹⁾。タイでも、腐植質と水に乏しい酸性の砂地、あるいは、粘土質のサトゥーン半島に最も多く栽培されている⁽³²⁾。「乾燥によくたえ」と同時に、「また水害にも強く、半年ぐらいい水につかってもかかれることはないから、洪水の多いメコン川流域やインドに適しており、」ともいわれる⁽³³⁾。タイでは、水田地帯にふつうに見られるが、少なくとも、乾季は必要のようである。

次に、用途・利用度の問題である。

パルミラヤシの利用価値は高く、この点、コリファヤシは遠く及ばない。双方とも葉を傘⁽³⁴⁾や敷物、書写素材等に用いるが、前者の場合、幹は、家具や家に、根は葉に、葉は、屋根材、燃料、帽子などに、葉柄は、フェンスや燃料に、果実は、牛や豚の飼料や食料に、種は、燃料や食料に利用され、その植林は強風や雷を防ぐ環境保護にもなって、全くの無駄がない⁽³⁵⁾。特に、その樹液（花序液）は有用で、これからは、ヤシ砂糖、及び、酒、食用酢、薬用物などが作られる。「樹液は長ければ八〇年間採り続けられ」⁽³⁶⁾とされ、しかも、年平均600リッターも採れる（Bill Dalton 氏）。

パルミラヤシは、このように貴重な生活資源、産業資源となっているが、コリファヤシは、ライフ・サイクル（生活環）の長大であることもあって、それほどの有用性はない。この点については、ハーンリにも詳しい言及がある（既出、123～124頁）。

ハーンリによれば、書写用紙としてのコリファヤシは、15世紀頃まで（中北部、西部）、あるいは、18世紀中葉まで（ピハール州、スリランカ）用いられたが、その後はパルミラヤシ（及び、紙 Paper）に取って代わられた、それは、これら二者の利用価値の大小による作付け転換に伴うものであったとされている（124頁）。インドにおけるパルメラヤシ、また、このハーンリの説については次に触れよう。

3. ハーンリ Hoernle の所説

大唐西域記の「恭建那補羅國」の条の「多羅樹林」につき、ハーンリは、次のように述べている。

There is a notice in Hiuen Tsiang's Travels (Beal, vol. ii, p.255) of the existence of "a forest of Tala

trees" near Konkanapura in South-India. The exact site of that place is still a matter of dispute (see *Indian Antiquary*, p.115, p.28); but it must be somewhere in the Conkan, which is the limit to which the *Corypha umbr.* grows freely in *cultivation* (though not *wild*). The pointed notice of the "forest of Talipat palms" is curious. It must have been a particular feature of that place, and must have been shown to Hiuen Tsiang as such. In the forest there was a Stupa; and Hiuen Tsiang adds that "in all the countries of India the leaves of the Talipat palm are everywhere used for writing on". Here we seem to have a clear instance of a plantation of *Corypha* palms, on a large scale, for the purpose of growing leaves for inland use or for export. Writing was mainly carried on in Buddhist and other monasteries, and probably there were *Corypha* plantations connected with most of the larger monastic establishments in South India; only the Konkanapura plantation would seem to have been one on a particularly large scale.

("An Epigraphical Note on Palm-leaf, Paper and Birch-bark", p.124)

その「多羅樹林」を、ハーンリは "Tala trees" と訳し、"Talipat palms" と英訳し、更に、"Corypha palms", また、"Corypha Plantations" と置き換えている。その林の所在については議論の余地があるが、しかし、それは Concan のどこかであり、ここは *Corypha umbr.* が野生 wild でなく、栽培 cultivation で自由に成長する限界内である、ともある。

このヤシ林のヤシをコリファヤシと考える点は、結果的に、本稿の結論と同じである。しかし、ハーンリがそう解釈した理由は何であろうか。

大唐西域記の「多羅(樹林)」は、Tala の音訳と解し得ても、必ずしも Talipat palms を意味するものとはいえない。また、ハーンリは、後に、Dr. Prain 宛に照会したその回答文に、「Tala-phala が、Tala ヤシであるか Tali ヤシであるか、即ち、Borassus ヤシか Corypha ヤシかという身元確認」云々(132頁)とある条を引いており、「多羅」との表記は、容易に "Talipat palms" ・ "Corypha palms" と置き換えられないことを知っていたはずである。

「多羅」との表記、即ち、Tala とは、基本的には、パルミラヤシ、即ち、Borassus ヤシの称呼であろう。

例えば、G. Bühler には、

chiefly from the large-leaved palm-trees, the *taḍa* or *tala* (*Borassus flabelliformis*) and the *taḍi* or *talī* (*Corypha umbraculifera*, or *C. taliera*) which, originally indigenous in the Dekhaṇ,

とする条がある(既出、113頁)。taḍa と taḍi はヒンディー語、tala と talī はサンスクリット語である。

また、O.P. Agurawal, "Conservation of Manuscripts and Paintings South-east Asia" では、*Borassus flabellifer* Line (*palmyra palm*) を "Sanskrit name, *Tal*; Hindi, *Tar*", *Corypha umbraculifera* Line を "Sanskrit name, *Karalika*, *Sritalam*, *Talī*" としている(既出、25頁)。

大唐西域記には、次にも「多羅」との表記が見えている。

昔南海僧伽羅国王清旦。以鏡照面不見其身。乃觀瞻部州摩揭陀国多羅林中小山上有此菩薩像上。

(大唐西域記、卷9、大正新脩大藏經、第51卷、925頁)

玄奘が、那爛陀寺を発って伊爛拏鉢伐多国(中印度境)に向かう途中、ビハールの観自在菩薩像を拝した条に見えるものである。「多羅」は高木林をなすが、ここには、この「多羅」の葉には聖語が写し留めらる、との含みもあろう。

この条の「多羅」につき、水谷真成氏は、

多羅。tā. lā: Skt. Pa. tala. また哆羅とも。高竦樹と訳す。学名 *Borassus flabelliformis*. シュロ科に属する喬木。卷十一の(後略)

(既出、大唐西域記、平凡社、309頁)

と注釈し、季羨林氏等も、

多羅：梵語 tala 音訳、又作哆羅、為高大喬木、学名 *Borassus flabelliformis*. 亦見本書卷十一恭建那補羅国条。(既出、大唐西域記、774頁)

と注釈する。

『仏教植物辞典』(既出)では、「多羅」は、Tala、学名は *Borassus flabellifera*、Linn とし、音義や仏典を引き、また、その梵語名や複合語(32語)を挙げる(夕部、「292.多羅」、75~76頁)。但し、本書は、この「多羅」と「貝葉(貝多羅葉)」、(八部、「貝葉」、83頁)とは異なるような書きぶりとなっている⁽³⁷⁾。

『望月仏教大辞典』(第5巻、昭和8年初版、同38年四版、世界聖典刊行協会、4181頁)、鈴木學術財団編『漢訳対照梵和大辞典』(新装版、1986年、講談社、537頁)などでも、大体、同様であり、tala はパルメラヤシ

(*Borassus flabellifer* , または, *Borassus flabelliformis*) であって, これをコリファヤシ (*Corypha palm*, または, *Talipot palm*) とするものはない。

『漢訳対照梵和大辞典』, また, 水野弘元著『パーリ語辞典』(1970年, 春秋社, 118頁) などでは, 見出し語 *tala* (パルメラヤシ) に次いで, これを構成要素とする多くの複合語や関係語句が挙げられている。これは, 即ち, 前節に見たように, パルメラヤシが社会・経済, 庶民生活等に深く関わっていることを物語るものであろう。(これに対し, *tali* の所掲はないようである)

さて, こうしてみると, ハーンリは, 一体, 何をもって「多羅樹林」を "*Talipot palms*" "*Corypha palms*" と解釈し, 英訳したのであろうか。

これについては, 実は, 以下のような事情がある。

ハーンリの上記の論文によれば, 書写素材としてのコリファヤシ (タリポットヤシ) の葉とパルミラヤシの葉とは, 容易に (*easily*) 区別できるという。即ち, 彼は, 130点ほどの写本 (貝葉本) につき, 細かな実測を重ねた後, 次のように述べている (要約)。

Corypha umbr. コリファヤシの葉は, パルミラヤシ *Borassus fl.* より薄く, また, 幅広であり, 小川のように流れる縞模様の中にはっきりと十字形の葉脈を有している。他方, パルミラヤシの葉は, むしろ, あばたの, あるいは, あばた肌の様子 (外見) を呈しており, この葉幅は, 決して, $1\frac{3}{4}$ インチ (4.46cm) を越えることはなく, $1\frac{1}{2}$ インチ (3.81cm) を越えることは非常にまれである。

パルミラヤシの写本の大多数は, $1\frac{1}{2}$ ~ 1 インチ (3.81 ~ 2.54cm) 幅であり, 1 インチ (2.54cm) 幅以下は, とてまれである。

コリファヤシの葉の通常の幅は, $3 \sim 1\frac{3}{4}$ (4.46 ~ 7.62cm) であり, これによる写本は, $2\frac{1}{2} \sim 1\frac{3}{4}$ インチ (6.35 ~ 4.46cm) であり, $1\frac{3}{4}$ (4.46cm) 幅以下の写本は一般的でない。

(p.94 ~ 95)

わずかな例外もあるようだが, ハーンリは, 大体, 写本の料紙幅が4.46cm以上 (または, 3.81cm以上) ならコリファヤシによるもの, 3.81cm以下 (または, 4.46cm以下) ならパルミラヤシによるもの, と説く。従って, その写本がいずれのヤシによるものかを知るには, その葉幅, 即ち, 料紙幅を計測すればよい, これは, ほとんど絶対的なテストである "The width, therefore, is an almost absolute test" (p.95) , という。なお, 疑いがある場合には, (イ) 葉の厚さ, (ロ) 葉脈, の二つの追加テストを行えばよいとする。

ハーンリは, また, パルミラヤシの葉の半片 (中央の *rib* に沿って縦長に裂かれた一片をいう) は, 両端に至って先細りとなり, 得られる内の最大の切片は, 長さ約 $16 \times$ 幅 $1\frac{1}{2}$ インチ (40.64 \times 3.81cm) である, (写本の料紙として) 調製された葉で16インチ (40.64cm) 以上の長さを有するものは, コリファヤシである, とも述べている (p.96) 。

それが, ほとんど "absolute test" であるとされるなら, 疑いも生じにくく, 追加テストも用意されないでしまうことになるが, ハーンリは, こうした判別方法をもってインド各地の写本を調査・検討し, 次のような結果を得たとする (要約)。

To sum up the result of my enquiries into the use of palm-leaf as writing material, it appears that—

(1) Originally none but leaves of the *Corypha umbr.* palm were used throughout India. This state continued down to the 15th century.

(2) From the middle of the 15th century their use was discontinued in Western India, no other kind of palm-leaf replacing them.

(3) From the beginning of the 17th century they ceased to be used in Bengal and probably Orissa, the leaves of the *Borassus fl.* taking their place.

(4) In Behar their exclusive use continued down to the middle of the 18th century.

(5) The use of the *Borassus flab.* is comparatively modern, and it is, and was, nowhere current in Northern India, outside Bengal and Orissa.

(6) Paper began to come into use, in the Centre of Northern India, in Western India and in Eastern India about the middle respectively of the 13th, 14th and 15th centuries.

(7) In the Centre and West it entirely superseded, in the 15th century, the writing-material previously in use, that is, palm-leaf in the West and perhaps birch-bark in the Centre. In the East it maintained a finally successful rivalry until comparatively recent times.

(p.122)

書写素材として, コリファヤシに替わってパルミラヤシが用いられたのは, (16世紀末 ~) 17世紀初 ~ 19世紀初頭 (ベンガル, オリッサ等の東部インド地方) という, 比較的近代のことであるとされる。こうした結論を承けて, また, ハーンリは, パルミラヤシそのものがインド

に導入されたのは、比較的近代になってからのことであると推測する。

But it is difficult to suppose that the employment of the Borassus leaves as a material for writing can be separated by any long interval from the introduction of the Borassus palm into India. The tree could not well have existed long in India without its useful properties being discovered. If the use of its leaves for writing grew up in the 15th or 16th centuries, its introduction can hardly be placed much earlier than the 14th century. (p.124)

パルミラヤシは、資源として、コリファヤシより各段に有益なものだから、インドに導入されたなら直ちに栽培、流布し、活用されるはずである、この活用以前に、ひとり書写素材としての用途のみが早くから存在していたはずはない、書写に用いられた時点は、その導入時の直後である、とされるのである。

ハーナリは、大唐西域記の「多羅樹林」を "Talipot palms", "Corypha palms" と解釈し、英訳した。それには、以上のような経緯があったのである。

ハーナリの論文は重厚なものであり、翻訳、重版も行われ、東西の研究者⁽³⁸⁾に大きな影響を与えている。これを批判するのは容易でない。しかし、大小の問題を抱えているのは確かのように思われる。

その一点は、料紙の大小を基準にヤシの種類を問うのは安全ではないという点である。

ハーナリの結論は、どちらかといえば、大部の、あるいは、良質の内容をもつ大型写本を中心として導き出されたものであり、そもそも、こうした場合には、コリファヤシが使用される傾向が強い。たとい、パルミラヤシが存在する時代であっても、である。とすれば、この種の大型本をもって、当時におけるパルミラヤシの存否を論ずることは許されないことである。

内容の劣る、小型本・中型本等、あるいは、文書類など、後代に遺存することを期待されない場合には、パルミラヤシが使用され、また、コリファヤシも使用されたかと推測される。

コリファヤシの葉からは、確かに大型本用の大きな料紙が切り出せる。葉の中央部を用いるのである。だが、それを切り取った後の両端も利用できる。また、幼芽(幼葉) bud(の塊)の脇の部分に位置する葉も利用できる。これらの短小の、また、幅の狭い葉・部分を利用すれば、中型本・小型本等の作成は可能である。ハーナリの扱った中型本・小型本等の中にもコリファヤシの葉

によるものがありはしなかったかと畏れる。

写本の大きさ(形態)が、素材(ヤシの種類)を判別するのに有力な手段となるかも知れないが、しかし、これは必ずしも万能ではないであろう。過信することは危険である。古写本類の中には、黒ずんだり変質したりしたものがある。その葉(料紙)の模様の判然としないことも多い。

次の点は、インドでは、比較的近代に至るまで、本当にパルメラヤシは存在しなかったのかという点である。私見では、ずっと古く、否、どんなに遅くとも、玄奘の時代、即ち、唐代(618 ~ 907年)には、これが存在していたと判断されるのである。これについては次節に述べよう。

4. 仏書・仏書音義

(1) 玄奘音義

玄奘は、玄奘がインドから帰国して訳経に入った時(貞観19年6月)、「字学大徳一人」(大慈恩寺三蔵法師伝、巻6)として訳経に従事した学僧である。その玄奘撰一切経音義(648年頃成、25巻)には、ヤシの「多羅」「多羅果」について、次のように見えている(内は底本に割り書き、/印は改行)。

多羅 案西域記云其樹形如櫻欄極高者七/八十尺果熟則赤如大石榴人多食之/東印度界/其樹最多
(巻2, 大般涅槃經, 第1巻に所出語)

多羅果 其樹形似櫻欄直而高聳大者數圍花白而大若
/若捧兩手果熟即赤狀若石⁽⁷⁷⁾增生⁽⁷⁸⁾經百年方有/花果
旧言/貝多訛也

(巻23, 広百論, 第3巻に所出語)

共に『古辞書音義集成 一切経音義』(昭和55年、汲古書院、上、104・105頁、下、677頁)によった。底本は、書陵部本である。二例共、慧琳音義に収められており、ここでは、前者は、

多羅樹 案西域記云樹形如櫻欄高六七十尺果熟則/
赤似此国石榴東印度多有国人收取食之也

(大正新脩大蔵經, 第54巻, 464頁)

となっている。宝永5年の大和本草巻11(益軒全集、巻6)等にも引かれているが、「案西域記云」と見える書が、玄奘の大唐西域記(辯機編)、大唐西域求法高僧伝(2巻、義浄撰)、その他、何を指しているか、はっきりしない。あるいは、不特定の書籍を指すといったこともあるかも知れない。「此国」とは、中国(唐代)をいう。但し、ザクロは、本来、イランのザグロス山脈(山系) Zagrosに因んで命名された植物とされる。

「高者六七十尺」とは、13.8 ~ 16.1m (小尺の1尺 =

約23cm前後) こうした高さをもって、また、多分、その樹形のすっきりした美しさも与って、このヤシは高さを測るモノサシ(基準)にもされた。即ち、ここの経本文には、「以仏神力去地七多羅樹。於虛空中默然而住。」(大般涅槃經、第1巻、同大蔵經、第12巻、367頁)⁽³⁹⁾と見える。「(高)七多羅樹」「長八十多羅之樹」のような表現はこの他の仏典にも見えている(例、方広大莊嚴經、唐地婆訶羅訳、同大蔵經、第3巻、541、584、596、585頁)。

後者の場合にも、若干の異文がある(同大蔵經、第54巻、63頁)。これが相当する本文には「応如烏鵲厄多羅果。由如是等衆多過失。」(同大蔵經、第30巻、200頁)とある。

玄応音義や慧琳音義は、漢訳仏典の語句について注釈を施したものである。漢訳仏典の原典は、インドや西域などからもたらされた貝葉本 Palm Leaf Manuscripts、その他である。従って、上記の被注語も貝葉本等に見えている訳だが、ハーノン氏によれば、これらは、皆、コリファヤシ(タリポットヤシ)ということになる。果たして、そうであろうか。

玄応音義の注釈によれば、「多羅」の実は、熟れば赤く、ザクロ大となり、食用とする、しかも、「東印度」の境域に最多、とある。これは、パルミラヤシ(の果実)を指すと見てよさそうな表現である。これに対し、コリファヤシの実は、とうてい、食べられない。

パルミラヤシの果実(外果皮のまま)は、(日本の)「リンゴの大きさと同じ」(阿部、ヤシの生活誌、182頁、「パルミラヤシの果実」の写真も掲げられている。)といわれ、より詳しくは、その「果実は直径一二~一八センチで、表皮は滑かだ。若い果実は緑色で、成長するにつれ茶色がかかり、成熟すると濃茶もしくは黒色になる。果肉は白く、二~四個(通常は三個)の種がある。種は幅四センチ、長さ六センチ、厚さ一・五センチで、二つの面の真ん中に長く浅い溝がある。種子の中は白濁し、ゼリー状の胚乳*だ。果実が成熟すると、胚乳は硬くなり、果肉は黄色く変わる。」「成熟する前の胚乳は柔らかく、ほのかな甘味をもち、食用とする。これをシロップ漬けにした缶詰が日本にも輸入されている。」(上文、*印部の注)と説明される⁽⁴⁰⁾。

外果皮の色につき、先には、「黄色~褐色~黒色」(『園芸植物大事典5』)ともあった。「色」の概念や範疇は、民族や国、時代によって必ずしも一定しないが、タイやバリで実見したところは先に述べた⁽⁴¹⁾。ただ、例示にザクロが持ち出されているが、これが、逆に注釈に影響を及ぼすようなこともあったかも知れない。

ところが、後者の注釈には、「生経百年、方有花果」ともある。これはコリファヤシ(タリポットヤシ)のことをいっているらしい。このヤシは、かつて、100年経つと開花して実が着き、枯死する、と言い伝えられていた(スリランカ)⁽⁴²⁾。昔は、人は皆、寿命が短く、このヤシの一生を確認したものはいなかった。そこから、このヤシは、人の生涯を越えて100年も長生きするという俗伝が生まれたのである。実際には、30年、あるいは、50年、80年といったライフ・サイクルであろうが、長大な時間を経て初めて花果を持つのが、このコリファヤシである。一種の驚きをもって語り伝えられたのではなからうか。

後者には、また、「花白而大、若捧両手」と見える。両手をいっぱい広げて、こんなに大きいのだ、と説明されたそのままを書いたような文言である。コリファヤシは大きな房状の花序をもつ。

玄応は、学識豊かな人物である。しかし、この後者の注釈には、パルミラヤシとコリファヤシとの混同があるらしい。パルミラヤシの説明に、特異なコリファヤシの伝聞が付加されたかのようである。

たとい、それが仏陀の教えを伝える聖教の素材であるとしても、彼の場合、こと、遠いインドのこととなれば、伝聞に頼るしかなかったのであろう。注釈の初めにも「案西域記云」とある。混同は、やむを得ないところだったかも知れない。

しかし、こうした混同があるにしても、この玄応音義によれば、当時、インドにはパルミラヤシもコリファヤシも実在していたことになる。そうでなければ、この記述は成立しない。特に問題はパルミラヤシである。これが、既に、インドに実在していたからこそ、その形態や東インド地方に多いという植生、その果実の用途等々が伝達されていったのである。

被注語の「多羅(果)」は、従って、パルミラヤシの tala という梵音を転写した音訳語と認められよう。

注文に、「旧言貝多、訛也」とある。これは、旧訳に「多羅」(パルミラヤシの葉)を pattra (葉)の意の「貝多」(「貝多羅」の略)と解するのは誤りとの謂いであろう。

(2) 慧琳音義

同じく唐代の慧琳(768~820年)にも、一切経音義の撰述がある(100巻、783~807年)。ここには、「貝多」につき、次のような注釈が見える(長文であるので、私意によって句点を加える)。

貝多 西国樹名也、其葉可以裁為梵夾書墳籍、此葉

麤厚 / 鞭而難用，若書多以刀画為文，然後寘墨，為葉厚故也， / 不如多羅樹葉薄爽光滑白淨細好全勝貝多，其多羅樹最 / 高出衆樹表，若斷其苗決定不生，所以諸經多引為喻，此等 / 形状 𠄎(𠄎) 似櫻欄，五天皆有，不及南印度者為上，西域記中具 / 說，其梵夾葉數種不同，隨方国土，或用赤樺木皮或以紙作 / 或以獸皮或以金銀銅 / 葉，良為諸土無紙故也

(卷10, 仁王護国陀羅尼經 < 不空訳 > に所出語，大正新脩大藏經，第54卷，367 頁)

經本文には、「苟于誠不克曷降之以嘉三藏是以貝多之文。」(仁王護国般若波羅蜜多經陀羅尼念誦儀軌，同大藏經，第19卷，514 頁) とある。「貝多之文」とは、「貝多」に筆刻された梵經である。

ここには、「貝多」と「多羅樹葉」との二種の料紙が比較され、前者は、後者に劣るとする。即ち、概要をたどれば、「貝多」の葉は裁断して梵夾(ヤシの葉の写本)を作り、墳籍を書す、この葉は麤厚で堅くて使いにくい、もし文字を記すには、多く刀で引っ掻いて文章を書く、その後、墨を入れる、これはその葉が厚いからである、「多羅樹葉」の、薄く柔らかで、光沢があつて滑らかで、白くきれいで品質がよいのに過ぎるものはない、(これは)全く「貝多」に勝っている、その「多羅樹」は、最も高い木で衆樹にぬきんでており、もしその苗の先端を切断すれば、決して育たない、だから、諸經の多くがこれを引いて喩えに用いている、これらの形状は巨大で、シュロに似ている、「五天竺」(中・北・東・南・西インド)には皆、生えている、中でも「南印度」のものが上等で、これに及ぶものはない、西域記の中に詳しく説かれている、その梵夾の葉(料紙)は、数種類あつて同一ではない、各国地方により、赤樺木皮、紙、獸皮、金銀銅の薄板を用いる、まことに(このような状況は)諸国に紙がないからである、となろう。

窺うに、ここの「貝多」はパルミラヤシ、「多羅樹葉」はコリファヤシに、それぞれ相当するようである。とはいいいながら、「其多羅樹最高」以下は、「中印度者」を別とすれば、パルミラヤシのことをいっている。

慧琳は、梵夾の料紙として二種のヤシがあることは理解している。だが、適切な名称をもって端的に言い分けることができなかつたらしい。Ranbir Kishoreは、こうした場合、パルミラヤシの葉を tāla , コリファヤシの葉を śrī-tāla と言いつけている ("Preservation and Repair of Palm Leaf Manuscripts", *The Indian Archives*, 1961-1962, p.73)。śrī (女性名詞) とは、光輝、美、繁栄、幸運、富、といった意味を持つ女性名詞である

(『漢訳対照梵和大辞典』, 1356頁)。

慧琳は、インドの声明や中国語の訓詁・音韻を研究した学僧であるが、出身は天山南路の要地カシュガル(疎勒国、新疆ウイグル自治区西部)であり、やはり、二種のヤシの実体(実態)については詳しくなく、むしろ、樺の樹皮や獸皮、紙などについてはよく知っていたかもしれない。

慧琳音義には、次のようにも見える。

多羅樹 < 此方无之古相伝樹高七仞一仞七尺理実樹形 / 如櫻欄極高長七八十尺花如黄米子大如鉢人 / 多食 / 之也 >

(卷27, 妙法蓮花經分別功德品，大正新脩大藏經，第54卷，491 頁)

經本文には、「則為起立僧坊。(中略)作諸殿堂三十有二。高八多羅樹高広嚴好。」(妙法蓮花經，第6卷，同大藏經，第9卷，45頁) とある。これも「多羅樹」を高さの基準したもので、「八多羅樹」はその八倍となる。但し、「七仞」は、7 × 7 × 小尺23cm = 11m27cm , 「七八十尺」は、16.1 ~ 18.4m の計算となる。これに関連し、醍醐寺本妙法蓮華經釈文には、次のようにある。

八多羅樹 < 慈恩云々々形如櫻欄・極高長七八十尺・花如黄米・ / 子大如針⁽³³⁾・人多食之・此方无之故不翻・古相伝云 / 樹高七仞・一仞七尺也・吉蔵依之・今案若依古伝・八多羅樹高三百九 / 十二尺・若依慈恩或五百六十尺・或六百四十尺也・小正云四尺曰仞・若 / 依此説・一多羅樹二十八尺・ / 八多羅樹二百廿四尺也 >

(卷下，古辞書音義集成，第4卷，178 頁)

この木は、中国には実在せず、古からの「相伝」によるとある。「黄米」とは、モチゴメ(黄糯)あるいは、小さい米(西安・延安など)の意で、花がそのようだというのであろうか。コリファヤシの場合の、その花房を形成する個々の小さな花が連想されるが、しかし、はつきりしない。「子」とは、種、果実の意で、大きさは「針(鉢)」のようだといい、これを食するといえ、この「多羅樹」はパルミラヤシを指すことになる。

(3) 慧苑華嚴經音義

唐の法蔵(643~712年)の資、慧苑(673~743年頃)⁽⁴³⁾撰述の新訳華嚴經音義、上下2巻も慧琳音義に収められている。唐の実叉難陀訳出の新訳八十巻本の音義であり、これには次のように見える。

多羅花 < 具釈如下 / 三十三中 >

(卷21, 大方広仏華嚴經音義上，経巻15，大正新脩大藏經，第54卷，440 頁)

宝多羅形 < 多羅者西域樹名也其形似櫻欄樹也体堅如

／鐵葉長稠密縱多時大雨其葉蔭処乾若屋下／今此以宝而成故曰宝多／羅也又或翻為高竦樹也>

(巻59, 大方広仏華嚴經音義下, 経巻33, 同大蔵経, 第54巻, 445頁)

後者は, 小川本花嚴經音義私記にも見えるが, 語順に小異があり, 「縦」が「従」, 「今此以」が「今以此」となっている(下, 71・72行)。経本文には, 前者につき, 「他化自在雨妙香 種種雜華為莊嚴 化樂天雨多羅華 曼陀羅華及沢香」(大方広仏華嚴經, 経巻15, 同大蔵経, 第10巻, 80頁), 後者につき, 「阿僧祇宝多羅形如半月衆宝集成。」(同, 経巻33, 同大蔵経, 第10巻, 174頁)とある。

前者は, 「多羅華」を雨降らすといった文脈に見える。このように形容される花となれば, 3ミリほどの小さな花を無数に着けるコリファヤシの方をいうのであろうか。一説に, 花の匂いが非常に強くて人々を悩ませるといふが, 筆者自身, それほどとは思われない⁽⁴⁴⁾。

後者は, 西域の「多羅」の樹は, 中国の櫻欄に似た樹形であり, 幹は鐵のように堅く, 葉は長く, よく茂って, 大雨が降ってもその下は濡れることがない, だからこれも衆宝の一つとするのだ, という(「縦多」は, 縦ざまに多し, とでも読むのであろうか)。こうした記述は, どちらかといえば, コリファヤシの方をいうのであろうか。このヤシの葉は大きいので, 傘にも軍用テントにも用いられ, キャンディ王国ラージャ・シンハRajasinha二世(在位1635~1687)の宝物庫には, この葉が資産として所蔵されていた⁽⁴⁵⁾。

玄応や慧琳, また, 慧苑の音義をもって「多羅」「多羅果」「多羅樹」の実体を求めていくには限界もあるかも知れない。金山正好氏も, こうした音訳語と梵文とを照合され, 「要するに, 中国では貝葉と多羅葉とは古くから混乱して使用されていたという他はない。」⁽⁴⁶⁾とされる。ことに, 梵篋(梵語仏典)となってしまうような場合, 二種のヤシ(料紙)は区別なく「多羅 tala」と称してしまっていたのではなからうか。

玄応や慧琳の注釈は, たとい, 伝聞を用いたにしても, インドにパルミラヤシが実在しない限りは書きよのないものである。慧琳のいう「古相伝」がどこまで遡るかはわからないが, 少なくとも, 玄奘, 玄応, 慧琳, 慧苑たちの時代, インドには, コリファヤシ同様, パルミラヤシも存在したと判断され, しかも, おそらくは, 近年までほとんど変わらない形で日常的に利用されていたものと推測される。

ところで, インド古代のことに關しては, よく, ペルシャの著述家アル・ビールニー Alberuni (973 ~

1043 A.D.) が引き合いに出される。その著書, "Alberuni's India" には, 次のように見える。

The Hindus have in the south of their country a slender tree like the date and cocoa-nut palms, bearing edible fruits and leaves of the length of one yard, and as broad as three fingers one put beside the other. They call these leaves *tār* (*tāla* or *tār* = *Borassus flabelliformis*) and write on them. They bind a book of these leaves together by a cord on which they are arranged, the cord going through all the leaves by a hole in the middle of each.

(Edited with Notes and Indices by Edward C. Sachau, Munshiram Manoharlal Publishers Pvt. Ltd, New Delhi, 1992, vol. 1, p.171)

食用の果実が生ずるとあれば, これは, 文中の() 内に見える *tāla* or *tār* = *Borassus flabelliformis*, 即ち, パルミラヤシをいうものであろう(*tala*はサンスクリット語, *tar* はヒンディー語, ベンガル語は*tal*)。その木の形状, 葉の大きさ(長さ1ヤード, 幅3指×2), 用途からしても問題はない。

だが, この前に, *tār*とも記されている。これが, *tāl*, 即ち, コリファヤシであるとすれば, ここには二種のヤシが混同されていることになる。混同はされていても, その記述は, 当時, インドにパルミラヤシが存在していたことを物語っていよう。

ハーネリは, アル・ビールニーの言葉遣いは適切さを欠く憾みがあるとされ, いくつかの指摘をされている(前掲書, 125頁以下)。上記の部分についても, ハーネリは, 次のように述べている。

At the time of Alberuni (973-1043 A.D.) the *Borassus palm*, in all probability, did not exist in India for writing books. He says the leaves measured one yard in length, and three fingers in breadth: (中略)

In Alberuni's use of the term *tār* for the leaves, there appears to be some misunderstanding. But a greater difficulty is his remark about the edible fruits, as Alberuni is generally a careful observer and reporter. Personally he can have had no acquaintance with the tree, as neither the *Corypha* nor the *Borassus* grows in the localities where he lived: he can only have reported what he was told. But as the *Borassus palm* is out of the question, he must either have made a slip, or

the text of his work is handed down incorrectly. As immediately before he had mentioned a point of resemblance to the date and coconut palms, he probably now wanted to point out a point of difference, that the Corypha palm bore no edible fruits; he probably meant to say "a tree, slender like the date and coconut palms, but bearing no edible fruits." (p.125)

このハーンリによれば、アル・ピールーニーの時代には、まず、確実にBorassus palm はインドに存在していなかった、そこに記されているのは Corypha palm のことである、食べられる果実とある点は、彼がうっかりしていたか、テキストが間違っただけかである、彼は、コリファヤシは食用となる果実をもたないと指摘したかったのだ、とされる。

しかし、アル・ピールーニーの書き方を素直に見れば、そのような「修正」は必要ないと思われる。彼は、食べられる実ができるからこそ「食べられる実ができる」と書き留めたのである。ハーンリは、自身の調査を確信する余り、これに拘泥し、視野を狭めているのではなからうか。

先には、玄奘、玄奘、慧琳、義浄たちの時代（唐代）のインドには、コリファヤシと同様、パルミラヤシも存在したと判断した。降って11世紀前半に、同様の状況が認められても何の問題もないであろう。

5 . Lalita Vistra 所見の Tāla-phalasya

ハーンリは、3世紀には実在したLalita Vistra という伝典に見える Tala-phalasyaに触れ、これはパルミラヤシでなく、Kajur、即ち、サトウナツメヤシの実であるとする。

Professor Hara Prasad Shastri has drawn my attention to a passage in the Lalita Vistra (Bibliotheca Indica Ed., p.526, 1.12), in which the fruit of the *Borassus flabellifer* is supposed to be referred to. As the Lalita Vistra certainly existed as early as the 3rd century A.D. (having been translated into Chinese in 308 A.D.), we should thus have a testimony to a very early existence of the Borassus palm in India. The passage runs as follows: *tad-yath = api nama Tala-phalasya pakvasya samanantaravṛṇṭacyutasya bandhan-aṣ, rayah pita-nirbhaso bhavati ... , evameva Bhaguvato Gautamasya ... parṣ, uddhaiṁ mukha-maṇḍalam, etc., i.e.,* "just as the exocarp of the ripe

fruit of the Tala palm, when it drops from its stalk, is of a brilliant yellow, even so is the face of the Blessed Gautama perfectly pure."

(前掲書, p.132)

文中の綴り字はと解される。

Lalita Vistra は、Śakya-muniの行跡を詳細に記録した仏教経典である。上文にもあるように、西晋の永嘉2年(308)5月、竺法護により、天水寺において漢訳された。筆受者は沙門康殊、帛法巨。「仏説普曜経」、また、「方等本起経」ともいい、8巻から成る(出三蔵記集、巻7、大正新脩大蔵経、第55巻、48頁)。同本異訳(の一種)に、唐の地婆訶羅訳「方広大莊嚴経」12巻がある(大正新脩大蔵経、第3巻)。

竺法護は、月氏出身の祖先を持ち、敦煌に生まれた。師の竺高座と共に西域諸国を歴遊して36ヶ国語に通曉したといい、泰始2年(266年)に洛陽に来てから建興元年(313年)の間に、般若経、法華経、維摩経、無量寿経など多くの経典を訳出している(出三蔵記集、巻13、大正新脩大蔵経、第55巻、97-98頁)。

Lalita Vistraが、竺法護の漢訳以前に存在したとなれば、その文中に "*Tala-phalasya*"と見える点は問題である。つまり、梵語の *Tala-phalasya* は、ターラ(多羅)樹の果実の着いていることを(phala は、(樹の)果実の意の中性的名詞)、*pita-nirbhasa* は、黄光(*pita*=黄色の、*nirbhasa*=光輝、光り)を、それぞれ意味する(既出、『漢訳対照梵和大梵和大辞典』、537頁)。

ハーンリの英訳には、「丁度、Tala palmの熟した果実の外果皮が、その茎から落ちる時、光り輝く黄色となるように、聖なる釈迦牟尼の顔は、まさに、この上なく純清である。」とある。

そこで、ハーンリは、この梵文の一節を植物学者 Dr.Prain に照会したところ、

Borassusヤシも Coryphaヤシも、その外果皮 exocarp は'brilliant yellow'どころではない、熟して落ちた場合、前者の果実は'rusty brownさび色 赤錆色カの褐色'であり、後者のそれは'grey 灰色'である、熟した時、'brilliant yellow'と記されてよいのはKajur、即ち、wild dateの実である。Talaは、かつて、Kajurの一般的名称(汎称)ではなかったか?

といった内容の回答を得たと述べ、

This seems to me to speak for itself, and shows the necessity of caution in dealing with botanical terms occurring in old Indian literature.

と結んでいる(p.132,133)。

彼は、古代の作品（文献）に *Tala-phalasya* とは見えても、それが何を指すかが問題であるというのである。確かに、古文献に見える動・植物名が具体的に何を指しているか、往々にして問題となるところであるが、それが *Kajur* (wild date) なら *Kajur* と書いたはずである。

その *Kajur* とは、英語で wild date とあるように、サトウナツメヤシのことであろう。学名 *Phoenix sylvestris*, 梵語 Kharjura, ヒンディー語 Khajur, ベンガル語 Khejur であって、漢訳仏典には、渴樹羅、竭樹羅枝、竭樹羅枝, 佉受羅樹などの語形で見えている。インド東部に多く、真のナツメヤシ *P.dactylifera* L. より小型で、実も小さく、葉は羽状複葉、頂生叢出。上部の葉を剥ぎ取って切り込みを入れ、土壺を縛りつけて甘い樹液（ケジュレル・ローシュ）を採り、黒砂糖、酒を造る⁽⁴⁷⁾。

P.dactylifera の方は、エジプト、サウジアラビア、イラン、アフガニスタン、ペルシャ湾岸、インド西部など、砂漠系の地質に強く、実は、直径 2～3 cm、長さ 5 cm、色に赤、橙、黄、えんじゅ、黒っぽいものがあり、また、その熟度によっても色が違ふとされるが⁽⁴⁸⁾、人（釈迦牟尼）の容貌を喩えるには、これとても不向きではなからうか。

竺法護の訳した「仏説普曜經」（及び、唐の地婆訶羅訳「方広大莊嚴經」）は、大正新脩大藏經の第 3 巻に収められている（No.186、及び、No.187）。ここに漢訳された「多羅・果」との文言があれば、まず、当時（3世紀）の Lalita Vistra に *Tala-phalasya* とあったことは疑いなかろう。しかし、この漢訳本では、未だそれらしい箇所を検出していない。調査不足かとは思ふが、あるいは、この箇所が漢訳されていないのかも知れない。原初本にそれが存在しなかったということもあり得ようが、疑っていけば切りはない。また一方、竺法護（及び、地婆訶羅）の訳に「多羅果」とあっても、ハーニリのように解釈すれば、何の意味もないことになってしまう。

梵文に *Tala-phalasya* とあるのは、やはり、パルミラヤシの実をいうものであろう。この外果皮の色につき、「黄色～褐色～黒色」（『園芸植物大事典 5』）と説明されること、先にも引いた。他にも、外果皮には黒色と黄色の 2 種がある、とする植物事典がある。また、同属の、エチオピア・オウギヤシ *Borassus aethiopum* Mart. の果実は、（オウギヤシとほぼ同大で）黄橙色を呈する、成熟すると熟柿のように甘味強く、食用になる、ハイネ・オウギヤシ *B.heineana* Becc. の果実は、（径 12cm 位の球形に近く）黄橙色を帯びる、といった事例も参考にならなくはない。

これが熟して落ちる時、その実の *bandhan-aṣṣ rayah*

外果皮が *pita-nirbhaso* 黄色に輝くと形容されても、決して不可解なことではない。「パルミラヤシは一〇年以上たたないと実はならないが、その後は五〇年ぐらい、毎年一〇〇個ぐらいの実をつける。大きさは夏ミカン大で、」云々とされる⁽⁴⁹⁾。身近に存在する果実であり、顔かたちの喩えにも手頃であろう。

一方、コリファヤシの実は、薄いこげ茶色、あるいは、褐色である。何といても 20mm 前後の小さな球形で、果実というより種 seed といった方が分かりやすい。これが無数に実るのであるが、色も形も釈迦牟尼の顔を喩えるには向かないであろう。

「多羅果」・「多羅樹（林）」という言葉は、漢訳仏典には、ままだ、見えている。これについては別にも述べるが、金光明最勝王經から一例を引けば次のようである。これは偈の部分である。

設使閻浮樹 能生多羅果 佉受羅樹等 転生菴羅実
（合部金光明經、卷 1、大正新脩大藏經、第 16 巻、362 頁）（「使」を「令」とする伝本もある）

右は、隋沙門釈宝貴合・北涼三蔵曇無讖訳にかか一本（全 8 巻）である。この条は、唐の義浄の訳した 10 巻本に、次のように見える。

佉使瞻部樹 可生多羅果 竭樹羅枝中 能出菴羅葉
（金光明最勝王經、卷 1、大正新脩大藏經、第 16 巻、406 頁）（「瞻」・「果」に次の異文がある）

西大寺本の平安初期白点では、これを「佉使（ひ）瞻部樹にて、多羅の葉〔イ菓八〕生し又可クなり〔イ可ケム〕、竭樹羅の枝の中に、能ク菴羅の葉は出（で）むや。」（春日政治訳本）と読んでいる。「閻浮樹」、また、「瞻部樹」とは、Jambu の音写語で、フトモモ属の喬木ジャンボラン、学名 *Eugenia Jambolana* L. をいう。その実は、4、5 センチほどの楕円形をしており、全ての果実の中で最上とされ、不死の実・黄金の実と呼ばれる。「佉受羅樹」、また、「竭樹羅（枝）」は、先にも見えたサトウナツメヤシ Kharjura (学名 *Phoenix sylvestris*) の音写語、「菴羅（実・葉）」は、Amra の音写語でマンゴー、学名 *Mangifera indica* L. をいう。その葉は、ヒンドゥーの五種の神聖な葉の一つとされ、薬方や儀式に用いる。

問題の「多羅果（菓）」は、*Tala-phala* の訳語である（*Suvarṇa-prabhasa-sutra* : 梵文金光明最勝王經 南條文雄・泉芳環、京都、1931年）。ハーニリの立場からすれば、こうした場合も *Kajur* (Kharjura, wild date) と置き換えるのであろうか。しかし、これは、同じ文脈の中に別に見えている。「多羅果」は、やはりパルミラヤシと解すべきものである。

漢訳仏典に見える「多羅果」、また、「多羅樹(林)」につき、その原典の成立事情や文字化の時期等を調査すれば、インドのより古い時代のパルミラヤシの状況も、また、コリファヤシの状況もわかるはずである。だが、原典は、今日、ほとんど失われてしまっている。玄奘が西域から持ち帰った梵文仏典は、後代の散失と火難を恐れ、慈恩寺の西院の近くの180尺の甍塔(永徽3年 652 建立)に納めることになっていたが(大慈恩寺三蔵法師伝、巻7、大正新脩大蔵経、第50巻、260頁)、これとて、その後の状況は不明である。

あるいは、サンスクリット語(梵語)、その他の言語で書かれた古写本類を直に分析する方法もあるが、この場合、それが何時文字化されたかという点が問題になる。仏陀の教えが文字に刻まれた時期は、多分に下るからである。東晋の法顕が、律を求めてインドを訪れた時(隆安3年~義熙8年 399~412)、北・中インドや師子国(スリランカ)では、經典(律)は「亦皆師師口相伝授不書之於文字」(高僧法顕伝、大正新脩大蔵経、第51巻、864頁)といった状況で、文字に記されたものはまれであったようである。口伝・口誦が正確に行われていたとしても、もはや具体的なことはわからないであろう。

また、經典がヤシの葉に刻まれたにしても、その耐久性に問題があって、多くは、転写を繰り返していく他ないようである。転写は、やむ得ないとしても、転写の年代や転写の担当者、祖本についてのデータなどは、かつての日本の写本や訓点本における識語(奥書)のように詳しくないように見受けられる。

おわりに

ハーンリは、インドでは、古くから比較的近代まで、コリファヤシの葉を書写用に用いていた、玄奘の訪れた「恭建那補羅国」にその特大の産地があり、他国へ輸出していたと解釈し、パルミラヤシは、まだ存在していなかったと述べる。

これでは、玄奘が「特記」したことの意味も、玄奘・慧琳など、また、Alberuniたちの記すところも説明できない。そこで、私は、次のように考える。即ち、玄奘が訪れたインドでは、既にパルミラヤシは一般的に栽培され、また、自生してもおり、書写の素材(料紙)としてもふつうに用いられていた。しかし、貴重な典籍(宗教・歴史・文学など)には、コリファヤシが用いられる傾向があり、「恭建那補羅国」には、その名産地「多羅樹林」があった、同国は、コリファヤシを植栽し、葉を加工・調製し、書写の料紙を量産して他国へ輸出しても

いた、と。

スリランカでは、近年まで、書写用にパルミラヤシとコリファヤシとの二種が用いられた。この内、前者は、レターやノートを書く場合に用い、重要な典籍には用いない。貴重な典籍や記録・保管を要する文書には、調製を経たコリファヤシが用いられた。Robert Knox, "An Historical Relation of the Island Ceylon in the East-Indies" (London, 1681, p.109~113)、また、W.A.DE Silva, "Catalogue of Palm Leaf Manuscripts in the Library of the Colombo Museum" (Vol.1, 1938, p.13) 等にそうした事情が記されている⁽⁵⁰⁾。子供らが文字を学習していく場合でも、まずは砂板を用い、次にパルミラヤシの細片、次にコリファヤシの粗造の葉、次に精製されたコリファヤシの葉を用いるといった段階があった。

これはスリランカにおける事例であるが、インドにおいても、こうした使い分けはあったのではなからうか。たとい、古くからパルミラヤシが用いられていたとしても、これが貴重書の形をとってその後に珍藏されるとは限らないのである。やがて、パルミラヤシに押されてコリファヤシが衰退し、その料紙が得がたくなれば、パルミラヤシも貴重書の作成に供されたであろう。ハーンリによれば、それは、インド東部における、16世紀末以降、19世紀初頭までのこととなる。しかし、既に、唐代、書写素材としてパルミラヤシの存在が知られていたくらいであるから、インドにはこれを用いた実際の貝葉写本が日常的に存在していたことは相違ないであろう。のみならず、これが玄奘等の将来典籍の中に混じていた可能性もある。

インドにおけるパルミラヤシは、実は、もっと遡って紀元前2世紀に存在していたという情報もある。これは南インドのマドラス Madras (今はチェンナイ Chennai という)のInstitute of Asian Studies勤務のV.Ganesan氏からもたらされた情報で、これにつき、再度伺ったところ、次のようなe-mail(1998年6月29日付け)をいただいた。

Regarding the name of literature of 2 century B C where the mention about Palmyra was made, is 'Paripatal'. Even also, the Tamil grammatical text, Tolkappiam, has also reference to this tree and the word 'Panai' (Palmyra).

紀元前2世紀の'Paripatal' という作品にはパルミラヤシについての言及があり、更にまた、タミル語文法書 Tolkappiam には、このヤシについての記載があって同ヤシを'Panai' といっているという。

これらの文献については詳しくないが、後者はトルハ

ービヤムTolkappiyamを指している。これは、タミル地方の現存最古の詳細な文法書・詩作の規範書で、紀元前2世紀頃から徐々に作られ、後5世紀頃に完成したとされる。大野晋著『日本語以前』(1987年12月, 岩波書店, 339頁), 同著『日本語の形成』(2000年5月, 岩波書店, XX頁)では、紀元前3世紀,あるいは、紀元前後のタミル語資料として使用されている。'Panai'は、タミル語でパルミラヤシをいう⁽⁵¹⁾。

アラビア海・インド洋・南シナ海などの海域世界は、一旦、船の動力、即ち、風の規則性を知ったならば、容易に往復できたといい、紀元1世紀のローマの官吏・博物学者プリニウスGaius Plinius Secundus(23~79年)の『博物誌』(37巻)には、この季節風を利用すれば、40日でアラビアからインドに到達できるとの記述があるという。これ以前には、沿岸沿いの航路だっただけであつたはずであるから、パルミラヤシの種がアフリカからインドに渡った時期はずっと夙く、既に紀元前にParipatalのような作品があるといわれても不思議でない。

ところで、「恭建那補羅国」のヤシ園は、「周囲三十余里であつたという。「玄奘の言う一里はほぼ四百四百四十メートルほどと見てよからう」とされるから⁽⁵²⁾、周囲12~13キロメートルの林の中には1,000本前後のコリファヤシが植えられていたかも知れない。

「恭建那補羅国」にも伽藍が百余カ所あり、僧徒は一万余人、大小二乗を兼学し、天祠は数百カ所、異道の人々が雑居していたという。コリファヤシによる料紙は、ここでも使用されていたであろう。しかし、ここだけなら、そうして特記されるほどの特産地は必要なかろう、多分、隣国や他国がそうであつたように。この特産地は、何故に誕生し、存在したのであろうか。

推測されるその理由の一つは、このヤシ園は、チャールキヤCalukya王朝(前期西チャールキヤ王朝)、あるいは、それ以前からの王朝文化によって存在し、維持されたのではないかということである。

同王朝は、6世紀初め頃から8世紀中頃まで、主にバーダミBadamiを都としてデカン高原一帯を支配してきた⁽⁵³⁾。プラケーシン1世Pulakesin.(535頃~566年)によって基礎が固まり、キールティヴァルマン1世Kirtivarman., マンガレーシャMangaleśa(579~610年)と続き、プラケーシン2世Pulakesin.(610~642年)に至って国勢は拡大し、大いに繁栄した。大唐西域記の巻11、「摩訶刺侏国」の条に「補羅稽舎」として見える王がこれであり、同王の讃辞を刻んだアイホール碑文は、サンスクリット詩の中の傑作とされる。

同王は、南下してきた北インドの戒日王ハルシャ・ヴ

アルダナHarṣavardhanaを撃退し、他方、南方タミル地方のパッラヴァPahlava朝と覇を競ってクリシュナ・ゴードヴァリの両河間の地域(ヴェーンギーVeṅgi州)を獲得・併合し、王弟を派遣して東チャールキヤ朝を建てた。しかし、その末期、640~642年頃、パッラヴァ朝のナラシンハヴァルマンNarasimhavarman(在位630~668年)により、王都バーダミを占領され、王も戦死したという。

バーダミ陥落に先立って、王都は「摩訶刺侏国」、おそらく、ナーシクNasik(ボンベイの東北約150km)付近に遷っていたようで、玄奘が「恭建那補羅国」、「摩訶刺侏国」を訪れたのは、遷都の後、間もなくのこと、同王も没していた時期である。

チャールキヤ王朝の時代には、デカンの広い地域でヒンドゥー教、また、ジャイナ教の美術活動も盛んであり、首都バーダミ(6~7世紀)やその近くのアイホールAihole(5~7世紀)、パッタダカルPaṭṭaḍakal(6~8世紀)には多数の石窟寺院、石像寺院がある⁽⁵⁴⁾。6~8世紀頃のものが多いようであるが、7世紀中葉からはパッラヴァ朝の影響も見られるとされる。同王朝の権力の強さはもとより、その文化的繁栄の様も偲ばれよう。玄奘は、この「恭建那補羅国」の人は、「顔貌は黄黒く、気性は粗暴である。学業を好み、徳行を尊ぶ。」(水谷真成氏訳)⁽⁵⁵⁾と記している。6世紀中葉から凡そ三百年もの間、抗争、緊張関係にあつたパッラヴァ王朝が「北インド文化の摂取に努力し、梵語を公用語とした」(同上)⁽⁵⁶⁾とすれば、こちらの側でも宗教(ヒンドゥー教)を擁護し、文化・教育行政に力を入れざるを得なかつたであろう。「恭建那補羅国」の条に記されたヤシ園は、実は、こうしたチャールキヤ王朝によって必要とされたものではなからうか。

「恭建那補羅国」は、「今日のKanarese語域に属する国。」で、その「形貌黎黒」とは「ドラヴィダ族の外見を示す語であろう。」(同上)とされる。しかし、同じ王朝下でも、次に訪れた「摩訶刺侏国」は、「ドラヴィダ語域を出てインド・アリア語のMarathi語の区域に入る(同上)とはいっても、このマラーティ語には、古くからカンナダ語Kanareseの借用が著しい⁽⁵⁷⁾。カンナダ語は、テルグ語、タミル語、マラーヤム語等と共に、ドラヴィダ語族Dravidaの内でも早くから"文語"を持つ南インド主要言語の一つで、現在Karnataka州の公用語となっている。

「恭建那補羅国」(カルナータカ州中北部)や「摩訶刺侏国」(マハラシュトラMaharāṣṭra州南部)を抱えたチャールキヤ王朝では、アリア文化とドラヴィダ文化

とが同化・吸収し合う地であって、マラティー語、カンナダ語、また、テルグ語、タミル語、サンスクリット語、その他が入り交じって行われていたであろう。尤も、これは、支配者層や識字階級、行政や学問・宗教の場、また、商取り引きなどの場における問題である。

サンスクリットやパーリ語文献が、古来、様々な地方や国の文字で記されたように、その地方の文字でその地方の言語が記されるとは限らない⁽⁵⁸⁾。例えば、一例として、N.Geethacharya氏によって報告された"Palm-Leaf Manuscripts in Kannada" (Institute of Asian studies, "Palm-Leaf and Other Manuscripts in Indian Languages", 1996, p.147-163) を参照すると、カンナダ語をカンナダ文字で書いた貝葉本は多く、また、サンスクリット語をサンスクリット文字 (Nagari or Nandinagari) で書いたものもあるが、この他にも次のような対応による写本が、僅かながらあるといい、

Kannada Scripts	Telugu Language
Kannada Scripts	Tamil Language
Telugu Scripts	Kannada Language
Telugu Scripts	Telugu Language
Tamil Scripts	Kannada Language
Tamil Scripts	Tamil Language
Kannada Scripts	Prakrit Language

更には、*Modi*, *Thigalri*, *Grantha*, *Arava*, *Manipravala* といった特別な文字による写本もあるという。これらには文芸作品が多いが、音楽、医薬、Ayurveda、宗教、占星術、Manthras、数学、地理学、天文学、教育、歴史、辞書など、テーマは多岐にわたっている。

インド各地からの報告によれば(同上書)、同様の状況は、大小、いずれにおいても認められるようである。他国語、他国文字によるものは、自国のそれに翻訳・翻字しないとどうしても利用しにくく、普及もしない。

「恭建那補羅国」のヤシ園は、まずは、このようなチャールキヤ王朝の文化状況、言語事情を担うべく経営されていたのであろう。

コリファヤシは、インド南部、スリランカの産とされ(標高600m以下の湿潤地帯)、同王朝領域の北部、また、インドの中央部から北部にかけては育ちにくい。これらの地域では、パルミラヤシ、また、樺樹皮、布、木板等を用いる他はない。が、輸入すれば、このヤシの葉(料紙)は入手できる。この辺の事情が「諸国書写莫不採用。」という記述であろう。良質の書写素材として、この葉は諸国から求められたのである。

(Mar. 13, 1998, 摺筆, Jul. 7, 2001, 修正)

注

- (1) 玄奘 Xuán Zàng の生年につき、隋文帝開皇16年(596)、同20年(600)、同帝仁寿2年(602)などの諸説がある。その遷化は、麟徳元年(664)2月5日、享年63歳。
- (2) 拙稿「インドにおける書写素材について」、『平成五年度高山寺典籍文書総合調査団研究報告論集』、1994年3月。
- (3) 16世紀頃から発展したようだが、早くから工業中心地となり、今は衛生通信を利用したコンピューター関係、ソフトウェア産業が盛んで、インドのシリコンバレーといわれる。人口500万人。バンガロールからマハシュトラ州のボンベイ(ムンバイ)まで、バスで25時間余である。
- (4) 前嶋信次著『玄奘三蔵』、1952(昭和27)年7月、岩波書店、105頁。
- (5) 前嶋氏、注(4)に同じ。
- (6) Millets は、単に シコクビエ(イネ科オヒシバ属)を指す場合と、モロコシ、トウジンビエ、シコクビエ、トウモロコシの四種を一括した夏作の雑穀を指す場合がある。シコクビエは、1ミリ強の実をつけ、アフリカやインド北部で栽培されているが、2400メートルまでの高地に強い主要な秋作物である(西岡直樹著『ネパール・インドの聖なる植物』、1996年9月、八坂書房、266頁)。日本でも、縄文時代からコメと並んで栽培されていた(『朝日新聞』、1998年2月14日)。島根県飯石郡頓原町の板屋遺跡(縄文時代、3000年前)からはシコクビエのプラントオパール(大きさ0.3mmくらい)が検出され、また、穂摘み用の石包丁が出土している。焼畑農法で栽培されていたらしい。については、辛島昇編『民族の世界史7 インド世界の歴史像』、1985年1月、山川出版社、144頁、また、坂本寧男執筆「ざっこく」、『文化人類学事典』、平成6年3月、弘文堂、306頁、参照。
- (7) 堀謙徳著『解説西域記』、1912(大正元)年11月初版、1972(昭和47)年8月再刊、国書刊行会。
- (8) ジョルジュ・ジャン(Georges Jean)著、矢島文雄監訳者『文字の歴史』、1990年11月、創元社、71頁。これは、「タミル語で書かれた「書物」として掲出されたカラー図版に付された解説である。窺うに、図版は、二穴の貝葉本Palm Leaf Manuscriptらしい。なお、この解説については、阿部登氏からの私信によって知った(1994年12月28日付)。
- (9) 阿部登著『ヤシの生活誌』、1989年2月、古今書院、

- 176・177 頁。
- (10) 木村登「ヤシと人々の生活」、『熱帯農研集報』, 33, 1978 (昭和53) 年12月, 28頁。
- (11) 独文 (1896年, 1977年), 英文 (1904年, 1959年, 1962年), それぞれに版が重ねられているが, 今, 1980年の Oriental Books Reprint Corporation (New Delhi) Reprinted 版による。
- (12) スリランカのマータレのアルヴィハーラ寺で調査した折 (1997年4月25~29日), ある村人が, 私どもを同寺の裏手の村に生えていた一本の高いヤシの木の下に案内し, 「これがコリファヤシだ, 下に落ちているこの実はその種だ」と説明した。開花, 結実の後の枯死の始まっているヤシであった。しかし, その実を拾い, アルヴィハーラ寺の寺僧や寺男に見せて確認したところ, 「これは書写に用いるヤシではない」との返答であった。コリファヤシの仲間にも微妙な差異があるということであろうか。
- (13) 荒俣氏著書, 1990年11月, 平凡社, 62頁。
しかし, 英名を talipot palm とする点, また, 「タリポットはベンガル語で<ヤシの葉>の意」とする点是不審である。
- (14) 小林良生「タイ国に貝葉 “パイラーン” を求めてタリポット椰子とコイ紙紀行」, 『百万塔』, 第55号, 1983年4月, 7頁。
- (15) 石井米雄執筆「貝葉」, 『タイの事典』, 1993年3月, 同朋舎出版, 265頁。
- (16) 小林氏, 注(14)に同じ。8~9頁。
- (17) 拙稿「スリランカにおける貝葉文書・典籍 (Palm Leaf Manuscripts) の作成方法について」, 『島根大学教育学部紀要』(人文・社会科学編), 第28巻, 1994年12月。
拙稿「スリランカのアルヴィハーラ寺における貝葉写本 Palm Leaf Manuscripts の作成方法について」, 『島根大学教育学部紀要』(人文・社会科学編), 第31巻, 1997年12月。
- (18) 崎山理執筆「ばいよう / 貝葉」, 『東南アジアを知る事典』, 1986年7月, 平凡社, 219頁。
崎山理執筆「ロンタル」, 『インドネシアの事典』, 1991年6月, 同朋舎出版, 458頁。
- (19) 東京夢の島熱帯植物館には, このニッパヤシの葉 (タイ産) で屋根を葺いた仮屋がサンプルとして展示されている (1993年4月24日実見)。ニッパヤシの主用途を示したものである。
- (20) 阿部登「ヤシの葉の構造とその耐久性」, 『SAGO PALM 2』, 1994年。
- (21) 東京夢の島熱帯植物館員松井映樹氏談話。注(19)参照。
- (22) 阿部氏, 注(9) 文献に, パルメラヤシの樹液から作った「練り砂糖のことをマレーシアではロンタルとよんでいる。ロンタルとはパルメラヤシのことである。」とある (178・180頁)。
- (23) この筆者は, 南タイの民間の非営利団体, パルミラヤシ職業開発グループ (1988年設立)。原文は英文, 今はその和訳による。鶴見良行・宮内泰行編著『ヤシの実のアジア学』, 1996年11月, コモンズ, 所収。236頁。
- (24) 西岡直樹著『インド花綴り』, 1988年7月, 木犀社, 158頁。
- (25) 注(23) 文献, 239頁。
- (26) 注(23) 文献, 237頁。
- (27) 拙稿, 注(17) 文献 (紀要, 第31巻)。
- (28) 『朝日百科 世界の植物 8』, 1978年10月, 朝日新聞社, 2120頁。
- (29) ガボン共和国のブチ・ロアング国立公園, 同動物保護区の場合, かつては栽培されていたが, 今は完全に野生化し, その実はマルミミゾウやシロネリマンガベイ (オナガザル的一种) などの好物になっている。NHK・テレビ, 「生きもの地球紀行 アフリカガボンの森」, 1995年6月25日 (日曜日), 午前10時05分~10時45分放映。
- (30) 「パルミラヤシからの地域づくり」, 注(23) 文献, 238頁。
- (31) 南西部にふつうに見られるココナツ・ヤシは, 逆にこの北部・東部地域には適さない。
- (32) 「パルミラヤシからの地域づくり」, 注(23) 文献, 242頁。
- (33) 阿部氏, 注(9) 文献, 177頁。
- (34) 葉を傘に用いるにつき, スリランカのコリファヤシの場合については下記に言及した。インドのパルミラヤシについては, 西岡氏に言及がある (注(24) 文献, 156頁)。
拙稿「17世紀におけるスリランカの書記生活について ロバート・ノックス著『セイロン島誌』」, 『島根大学教育学部紀要』(人文・社会科学編), 第30巻, 1996年12月。
- (35) 注(23) 文献, 236頁, 242・243頁。
- (36) 注(23) 文献, 238頁。
- (37) 吉川弘文館発行の『国史大辞典』(第11巻, 472頁) の「貝葉」の解説 (語釈) には誤りがある。
- (38) 一端を挙げる。

David Diringer, "The Book before Printing Ancient, Medieval and Oriental", 1953, New York, p.358 ~ 361.

Ranbir Kishore, "Preservation and Repair of Palm Leaf Manuscripts", *The Indian Archives*, 1961-1962, p.73.

小西正捷「インドの古文書料紙と製紙技術の成立」, 『山本達郎博士古稀記念東南アジア・インドの社会と文化』, 1980年, 山川出版社, 468頁。

小西正捷執筆「ばいようノ貝葉」, 『南アジアを知る事典』, 1992年10月, 平凡社, 540頁。

(39) 同大般涅槃經, 第12卷, 368頁にも類例「七多羅樹」とある。また, 同經には, 卷7にも「如断多羅樹」(同大藏經, 第12卷, 404頁)と見え, 慧琳音義の第25巻に「多羅樹 此云重直龍反謂葉葉相次ノ也或云檳榔樹似櫻欄樹」(大藏經, 第54巻, 469頁)とある。

(40) 注(23)文献, 238頁。

(41) 拙稿「タイにおける貝葉写本Palm Leaf Manuscriptsについて」, 『島根大学教育学部紀要』(人文・社会科学編), 第32巻, 1998年12月。

拙稿「インドネシア・バリ島における貝葉写本Palm Leaf Manuscriptsについて」, 『島根女子短期大学紀要』, 第37巻, 1999年3月。

(42) 拙稿, 注(17)文献(紀要, 第28巻), 63頁左。

(43) 坂本幸男著『華嚴教学の研究』, 1964年, 平楽寺書店, 58~110頁。

李惠英「慧苑と『統華嚴略疏刊定記』」, 『南都仏教』, 第72号, 1995年11月。

(44) 拙稿, 注(34)文献, 74頁。

(45) 拙稿, 注(34)文献, 75頁。

(46) 田久保周著, 金山正好補筆『梵字 悉曇』, 1981年10月, 平川出版社, 51頁。

(47) 西岡氏, 注(24)文献, 152頁。

(48) 阿部氏, 注(9)文献, 189頁。

(49) 阿部氏, 注(9)文献, 181頁。

(50) 拙稿, 注(17)文献(第28巻)

拙稿, 注(34)文献。

(51) 拙稿「南インド・マドラスにおける Palm Leaf Manuscripts の作成方法について」, 『島根女子短期大学紀要』, 第36巻, 1998年3月。

(52) 既出, 水谷真成訳『大唐西域記』, 416頁。

(53) R.S.シャルマ著, 山崎利男・山崎元一訳『古代インドの歴史』, 1985年8月, 山川出版社, 277頁。

既出, 水谷真成訳『大唐西域記』, 349頁。

(54) 肥塚隆「バーダミーの初期チャールキヤ朝美術」,

上野照夫著『インド美術論考』所収, 303~330頁。

(55) 既出, 水谷真成訳『大唐西域記』, 347頁。

(56) 既出, 水谷真成訳『大唐西域記』, 433頁。

(57) 亀井孝, その他編著『言語学大辞典』, 第1巻, 1988年3月, 三省堂, 1340頁。

(58) 彦坂周「全インド貝葉及び古文書文献のセミナーを開催して」, 『印度学仏教学研究』, 第44巻第1号, 1995年12月。

[補説1]

古代インドにおけるパルミラヤシにつき, 故事・逸話も参考になるかも知れない。

例えば, シッタールタ太子(釈迦)がヤショーダラ妃と婚約する時, 7本の多羅の幹を一本の矢で貫いたという話, 太子がカピラ城を去って, 獵師に変身した帝釈天の衣と自分の俗衣を交換して, パギャバ仙人を訪ねた時, 仙人が, 私の家の多羅には, いつも金色の花が咲き, 金色の果実が実っているのに, 今日突然しおれて落ちてしまった, 一体どうしたのでしょうか, と尋ねた話(満久崇磨著『仏典の植物』, 1977年, 八坂書房, 18頁), また, ラーマヤナ Ramayana の話の中に, 王子ラーマが, パルミラヤシの果実を見て, 魔王ラーヴァナに連れ去られた愛妻シータ妃のことを思い焦がれるという場面がある(阿部氏, 注(9)文献, 181頁)。

説話には後世のデフォルメがあることが多い。話の素材も, 当初のままとは限らないおそれがある。ラーマヤナは, インドの国民的叙事詩である。ヴァールミーキ Valmiki の作と伝えられているが, 今日のような形になったのは, 恐らく3世紀頃かと推定されている。テキストは, しかし, その後も動いており, 古い写本にパルミラヤシという語句を探索し, 年代性を確認するのは容易でないかも知れない。ここでは, 参考までにとどめておきたい。

[補説2](コーンカナブラの「多羅樹林」について)

Albertine Gaur, "Writing Materials of the East"に, 玄奘の大唐西域記の問題のヤシ園に言及して, 次のようにある。

Though the place itself has not been found Xuan Zang's reports has the ring of truth. Buddhist monasteries were centres of book production and nearby plantations would have ensured an adequate supply of writing material, just as in ancient Egypt papyrus plantations were maintained around Alexandria and other places where papyrus was manufactured. (1979年,

British Library Brard, P.12)

この趣旨は、いわば一般論として首肯されることである。大唐西域記によれば、そうした Buddhist monasteries は随所に記録されている。その近辺には、それらのための Writing Materials 供給源もあったと推測される。しかし、玄奘は、その存在に触れず、コーンカナプラのヤシ園のみを記録しているのである。そこで、筆者は、このヤシ園については特別な事情があったのであろう、即ち、これは良質の書写用の leaf (料紙) を供給するコリファヤシ園であった、他国には、パルミラヤシ (自生・野生・植栽) はあったが、こうしたコリファヤシ園はまれであったろう、と考えたのである。

[補説 3]

インドネシアは、世界最大の^{かきり} 緋の産地である。緋は、織る前に糸を束ねて括り、染め分けておくのであるが、この折の括り紐には、「乾燥させたロンタルヤシ (*Corypha utan*) の葉やトウモロコシ (*Zeamays*) の実を覆う葉鞘などが使われてきた。」とされる (吉本忍執筆、京都大学東南アジア研究センター編『事典東南アジア 風土・生態・環境』、平成9年3月、弘文堂、192頁)。ここで、吉本氏は、ロンタルヤシは、*Corypha utan* (コリファ・ウタン) であるとされているが、この根拠はわからない。

バリ島のトリ ガナン村 Tenganan (バリ、アガ Bali Aga) の婦人たちには、あらかじめ経糸と緯糸との両方を染め分けておき、後、これを織り上げ、模様を完成させていくという、非常に複雑で高度な技術 (経緯緋) が伝承されている。同村在住の I Wayan Muditadnāna 氏の夫人も、そのカンベン・グリシン (イカット ikat) の織り手であるが、同家の夫妻がロンタルヤシと称していたのはパルミラヤシであり、ロンタル文書もこの幼葉によって作成されている (注 (41) 参照)。

